

青少年教育の拡充と学習プログラムの開発に関する研究

- 青少年の家等における学校利用モデルプログラムを中心に -

研究研修課 社会教育主事 荻 宿 吉 宏

調査協力施設・学校

県立青少年の家（3施設）

平成7年度に県立青少年の家を利用した小・中学校
（177校）

プログラム実践協力施設・学校

県北青少年の家

二戸市立仁左平小学校、軽米町立小軽米小学校

一戸町立一戸小学校、一戸町立小鳥谷中学校

研究の概要

学社融合の理念に立った青少年教育の拡充方策を検討するとともに、青少年の家等教育施設における学校利用モデルプログラムを開発した。

活動実践をとおして、モデルプログラムの検証が行われ、次のことが確認された。

青少年の家における教科に位置づけた体験的な学習活動は、子どもたちの興味・関心を高める効果が大きいこと。

青少年の家での活動は、時間的にも空間的にも自由な広がりを持つとともに、専門性の高い活動が展開できること。

学校と青少年の家が一体となり、学校教育と社会教育の連携・融合が図られたこと。

キーワード：学社融合 教科 青少年の家 研修活動
教育資源 (データベース検索用)

目 次

1	はじめに	1
2	学社融合の理念に立った青少年教育の拡充のための基本的な考え方	1
(1)	学社連携と学社融合	1
(2)	青少年教育の現状と課題	4
(3)	学社融合の理念に立った青少年教育の拡充	6
3	青少年の家における学校利用モデルプログラム開発の基本構想	7
(1)	調査結果のまとめ	7
(2)	青少年の家を利用した教科に位置づけた体験的な学習活動の推進上の課題	9
(3)	青少年の家における学校利用モデルプログラム開発の基本構想	10
4	モデルプログラム開発のための試案	12
(1)	モデルプログラム開発の基本的な考え方	12
(2)	モデルプログラム開発の具体的推進	13
5	モデルプログラムと活動実践の分析・考察	15
(1)	事例1「単一学年による宿泊研修～小学校5年宿泊研修～」	15
(2)	事例2「単一学年による宿泊研修～中学校1年宿泊研修～」	19
(3)	事例3「複数学年による宿泊研修～小学校4、5年宿泊研修～」	22
(4)	事例4「授業形態による日帰り研修～プラネタリウムを利用した理科授業～」	31
6	研究のまとめと今後の課題	36
(1)	研究のまとめ	36
(2)	今後の課題	37
	主な参考文献	38

1 はじめに

今日、社会構造の変化により、青少年を取り巻く環境は大きく変わりつつある。こうした変化に対応し、青少年が心豊かに生きていくためには、自ら学ぶ意欲や社会の変化に主体的に対応できる能力を育成することが求められている。

平成8年7月の中央教育審議会答申『21世紀を展望した我が国の教育の在り方』は、これからの子どもたちに求められるものは変化の激しい社会を「生きる力」であり、それをはぐむためには子どもたちや社会全体に「ゆとり」が必要であると指摘し、それをはぐくむ視点として「学校・家庭・地域社会の連携によるバランスのとれた教育の推進」「生活体験・自然体験等の機会の増加」「生きる力の育成を重視した学校教育の展開」を示している。この指摘のとおり、これからの青少年教育は、社会の各領域におけるさまざまな教育機能の有機的関連において、その内容と方法を見直し、新たな方向を見出していかねばならないと思われる。

このような中で、青少年の家等の青少年教育施設は、これまでも学校と連携を図りながら青少年の集団宿泊や自然体験活動の場を提供してきているが、今後は、さらに一歩進んで、学校教育と社会教育が学習の場や活動など両者の要素を重ね合わせながら一体的な展開を図るという、学社融合の理念に立つことが重要になってくるものと思われる。

本研究は、このような把握から、学社融合の理念に立ち、青少年教育の拡充方策を検討するとともに、青少年の家等の青少年教育施設における学校利用モデルプログラムを開発しようとするものである。

2 学社融合の理念に立った青少年教育拡充のための基本的な考え方

(1) 学社連携と学社融合

これまで、学校教育と社会教育の関係については、「学社連携」という言葉が使われ、さまざまな場でその必要性が提言されてきた。

一方、「学社融合」という言葉の使用が急速に広がり、その考え方は、国立青少年教育施設の報告書や国の答申等にも登場し、生涯学習振興にあっても大きな課題となりつつある。

ここでは、学社連携と学社融合の考え方について整理し、それらが青少年教育に果たす役割について考察する。

ア 学校教育と社会教育との連携・協力

(ア) 学社連携の定義・意義

学社連携とは、学校教育と社会教育とがそれぞれ独自の教育機能を発揮し、相互に足りない部分を補完しながら協力しようとするものであり、それぞれの「独自性の発揮」と「相互補完の関係」というところに、その特徴がある。

学校教育や社会教育は、ともに人格の完成を目指し、それぞれ独自の教育内容、役割等をもつ教育分野ではあるが、単独の力では完全な役割を果たしにくいという限界性もあることから、お互いの機能が乗り入れすることによって教育効果を相乗的に高めていこうとするとともに学社連携の意義がある。

(イ) 学社連携が必要とされた背景

学社連携の重要性が強調されるようになった背景には、次のようなものがある。

青少年の意識・行動に見られる問題状況

社会教育審議会答申『青少年の徳性と社会教育』(昭56.5)は、今日の青少年の意識や行動に問題ともいふべきものが見られる状況の中で、青少年の人間形成を進めていくために必要な社会教育行政の課題として、家庭・学校・社会それぞれの教育機能の発揮と相互の有機的・総合的連携の必要性を述べている。

学校教育への過度の依存に対する反省

社会教育審議会建議『在学青少年に対する社会教育の在り方について』(昭49.4)は、「従来の学校教育のみに依存しがちな教育に対する考え方を根本的に改め、家庭教育、学校教育、社会教育がそれぞれ独自の教育機能を発揮しながら連携し、相互に補完的な役割を果たし得るよう総合的な視点から教育を構想することが重要である」と指摘している。

また、中央教育審議会答申『生涯教育について』(昭56.6)は、「家庭教育及び学校教育とあいまって、子どもの多様な能力や可能性を自由に伸ばし、発揮させる教育の場として、社会教育が重要な役割を果たしている。これらの教育はそれぞれの立場で子どもの人間形成の基礎を培う役割を担っているが、同時にこれら相互間において緊密な連携・協力が図られなければならない」と述べている。

さらに、臨時教育審議会答申『教育改革に関する二次答申』(昭61.4)は、「生涯学習体系の中で家庭・学校・地域など教育の各分野の役割や責任を明確にするとともに、相互の連携を図ることが必要である」とし、そのためには、「学校教育の役割の限界を明確化し、家庭や地域の教育力の回復と活性化を図る」必要があり、「学校は家庭と地域の教育と密接な関連をもつさまざまな活動を通じて家庭や地域に問題を投げかけ、その教育力の回復と活性化に資するようにしていくことが重要である」と指摘している。

生涯学習体系への移行

前出の中教審答申『生涯教育について』は、生涯教育の観点から、今後の課題として、「学校教育の弾力化と成人に対する開放」「社会教育の振興」「学校教育との連携・協力についても工夫・改善」「生涯教育関係機関の連携・協力等の促進」などをあげている。

また、先にふれた臨教審答申『教育改革に関する二次答申』は、「教育各分野の役割や責任を、時間的にも空間的にも幅広くとらえ直し、人生80年の生涯にわたり、タテ型の学習システムの長所を生かしつつ、家庭・学校・社会の三者が一体となった総合的な学習機会を拡大、整備し、総合的に生涯学習体系への移行を図ることが大切である」と指摘している。

イ 連携から融合へ

(ア) 学社融合の理念の登場

これまでみたように、学社連携の考え方は「学校教育と社会教育との連携・協力」と表現されていた。これが「連携・融合」という表現になったのは、臨時教育審議会答申『教育改革に関する三次答申』(昭62.4)の中で「従来の学校教育に偏っていた状況を改め、「開かれた学校」への転換を促進し、家庭・学校・地域が相互に連携・融合するようなシステムをつくる必要がある」「地域における生涯学習を推進する上で、家庭・学校・地域の三者が融合した総合的な学習機会を整備していく必要がある」と述べられており、ここにおいて、学社融合の考え方をみることができる。

学社融合の考え方が強調されるようになった背景として、次のことがあげられる。

青少年教育施設の効果的活用

国立青年の家・少年自然の家の在り方に関する調査研究協力者会議報告『国立青年の家・少年自然の家の改善について - より魅力的な施設に生まれ変わるために - 』（〒7.7）は、改善の基本的な方向の一つとして学社融合をあげている。その中で「これからの生涯学習社会においては、学校と学校外の教育がそれぞれの役割を分担した上での連携を図っていくというだけでなく、それ以上に相互がオーバーラップしつつ、融合した形で行われていくことが必要であり、また、それがむしろ自然である」と述べている。

学社連携の限界を乗り越えようとするもの

従来の学社連携について、生涯学習審議会答申『地域における生涯学習機会の充実方策について』（〒8.4）は、「学校教育はここまで、社会教育はここまでというように両者の役割分担は明確になったものの、必要な連携・協力は必ずしも十分ではなかった」と指摘した上で、国立青年の家や少年自然の家の学社融合を目指した取り組みは、「学校教育と社会教育がそれぞれの役割分担を前提とした上で、学習の場や活動など両者の要素を部分的に重ね合わせながら一体となって子どもの教育に取り組んでいこうとする考え方であり、学社連携の最も進んだ形態と見ることもできる」と述べている。

さらに、このことにより「学校だけでは成し得なかった、より豊かな子どもたちの教育が可能になるものと考えられる」として、学社融合の理念に立った事業の積極的な推進を求めている。

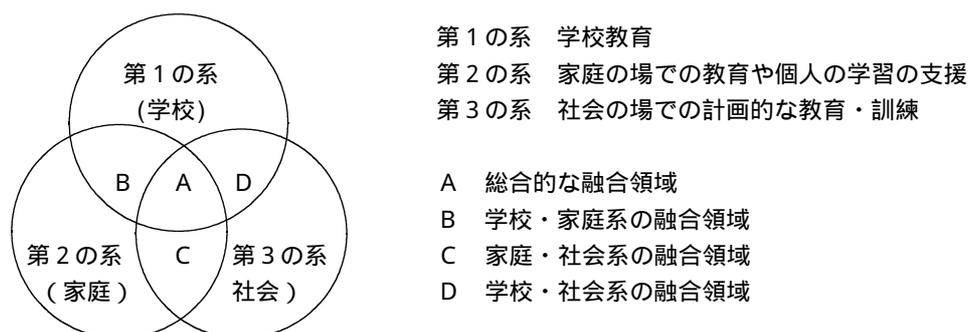
生涯学習社会における教育・学習システムの構築

地域・学校新システム研究会報告書「地域における青少年の学校外教育・学習システム構築に関する調査」（〒8.8）は、学社融合を「学校教育と社会における教育・訓練の融合のこと」と広義にとらえる立場から、「学校教育と地域社会の生涯学習関係の活動の融合とは、それらがそれぞれの一部を共有しあったり、共有の活動を作り出すことである」として、生涯学習の観点に立った、青少年の教育・学習のための学社融合システムの構築の必要性を述べている。

なお、このような学社融合システムのとらえ方としては、融合的生涯学習支援システムの考え方がある。『生涯学習の設計』（山本恒夫・浅井経子・手打明敏・伊藤俊夫 〒7）によれば、従来からの教育を、学校、社会、家庭の三つの系とし、これらの重複するところが融合部分となり、それらを三つの系から抜き出したものが融合的生涯学習支援システムである。学社融合は、このうちの社会・学校系の生涯学習支援システムに含まれることになる。

図1は、三つの系と融合部分の関係をまとめたものである。

図1 生涯学習支援の融合領域



(1) 本研究における「学社融合」のとらえ方

県立総合教育センター平成7年度研究紀要『生涯学習の充実に関する研究 - 学校教育と社会教育の連携をとおして - 』において、主として学校教育の側面から学校教育と社会教育の連携についての考察がまとめられている。ここでは、青少年団体と学校教育との連携の形態として、啓発型、融合型、浸透型の三つをあげ、融合型とは、「社会教育の機能と学校教育の機能が一体となって展開されるパターンで、学社連携が究極的に目指す形態である」として、連携のための基本構想を示している。

以上のことから、本研究は、学社融合を学社連携の最も進んだ形態ととらえ、学校教育と社会教育がそれぞれの役割分担を前提とした上で、学習の場や活動など両者の要素を部分的に重ね合わせながら一体となって子どもの教育に取り組んでいこうとする考え方に立って進めることとする。

これまで述べた学社連携と学社融合の考え方についてまとめたものが表1である。

表1 学社連携と学社融合

	学 社 連 携	学 社 融 合
定 義	学校教育と社会教育の連携の理念や方策の略称 学校教育、社会教育がそれぞれ <u>独自の教育機能</u> を発揮し、調和を保ちつつ連携を進めることで、 <u>相互補完</u> の関係を成立させようとする考え方。	学校教育と社会教育の融合の理念や方策の略称 学校教育と社会教育が、それぞれの役割分担を前提とした上で、学習の場や活動など <u>両者の要素を部分的に重ね合わせながら一体となって子どもの教育</u> に取り組んでいこうとする考え方。
意 義	学校教育や社会教育はそれぞれ独自の教育内容、役割等をもつ教育分野ではあるが、単独の力では完全な役割を果たしにくいという限界性もあることから、 <u>お互いの機能が乗り入れすることによって教育効果を高める</u> ことを意図しているところに意義がある。	学校教育と社会教育がその一部を共有したり、両者の重なる部分に <u>新たな教育活動を作り出して</u> いく意義がある。
背 景	(1) 青少年の意識や行動にみられる問題状況 ・社教審答申「青少年の徳性と社会教育」 (昭56.5.9) (2) 学校教育の現状への反省 ・社教審建議「在学青少年に対する社会教育の在り方について」(昭49.4.26) ・中教審答申「生涯教育について」(昭56.6.11) ・臨教審答申「教育改革に関する二次答申」 (昭61.4.23) (3) 生涯学習体系への移行 ・中教審答申「生涯教育について」(昭56.6.11) ・臨教審答申「教育改革に関する二次答申」 (昭61.4.23)	(1) 青少年教育施設の効果的活用 ・国立青年の家・少年自然の家の在り方に関する調査研究協力者会議報告「国立青年の家・少年自然の家の改善について」(平7.7.17) (2) 学社連携の限界を乗り越えようとするもの ・生涯学習審議会答申「地域における生涯学習機会の充実方策について」(平8.4.24) (3) 生涯学習社会における教育・学習システムの構築 ・地域・学校新システム研究会報告書「地域における青少年の学校外教育・学習システム構築に関する調査」(平8.8.3)

(2) 青少年教育の現状と課題

ア 子どもたちの現状と課題

(ア) 子どもたちの生活

近年の我が国の経済成長や高度情報化など、さまざまな分野における急速な進展は、社会を著しく変化させた。

このような大きな社会変化の中で、現代の子どもたちは、物質的な豊かさや便利さの中で生活を送り、過去の子どもたちにはなかった積極面が見られる一方で、ゆとりのない生活、社会性の不足や倫理観の問題、自立の遅れ、登校拒否やいじめなどが問題として指摘されている。

こうした問題の背景として、核家族化、少子化による社会性育成の機会の減少や人間関係の希薄化、受験競争による過度の塾通いなどによるゆとりとうるおいの乏しい生活、子どもたちの自然体験や社会体験の不足などがあげられている。

(1) 青少年期の発達課題

人間の生涯各期の発達段階に応じて、人々が学習し、解決を求められるものとして、発達課題がある。

前出の社教審答申『青少年の徳性と社会教育』は、人間形成と発達課題について、次のように述べている。

「青少年の人間形成のためには、乳児から幼児、少年、青年へと成長する各々の時期に心身ともに豊かに成長していくことが望まれるのであり、いずれの時期においても、それぞれ達成されなければならないと考えられる発達上の課題であることを指摘したい」と述べた上で、「人間性豊かな人格を形成するための各時期の発達課題としては、特に次のようなことが重要であると思われる。すなわち、……(略)……少年期には少年が活動性や自発性を発揮することであり、そして青年期には青年が自分の態度や行動に一貫性を保てるように自己の確立を目指すことである」と指摘している。

これらの発達は、子どもの多様な体験を通じて行われるが、近年のさまざまな環境の変化の中で、子どもたちの自然体験、勤労体験、奉仕体験、異年齢集団体験等が減少する傾向にあり、このことは、青少年期の発達上の深刻な問題と考えられる。

イ 青少年教育の現状と課題

(ア) 青少年の教育の現状

青少年教育（社会教育）

自然や人々とのふれあい、仲間と切磋琢磨するなどの生活体験や活動体験の不足から、ひ弱で主体的判断力に欠け、自己抑止力や協調性の乏しい青少年が増えている状況をふまえ、国や県においては、現在、自然体験、勤労体験、奉仕体験、異年齢集団体験など子どもたちの豊かな生活体験の場や機会を提供することに重点をおいた施策がとり進められている。

文部省においては、平成8年度から新たに「ウィークエンドサークル活動推進事業」が実施され、学校週五日制に対応する学校外活動の充実を図るなど、青少年教育重視の方向性が示されている。

本県においても、これまでの「地域少年わんぱく広場開設事業」をさらに充実させ、学社融合に向けた調査研究と「開かれた学校づくり」の推進を目指した「いきいきコミュニティ体験活動推進事業」を新たに実施、ふるさとづくりを主体的に考える青少年の育成を目指した「青少年ふるさと発見銀河鉄道推進事業」や青少年指導者養成事業を継続実施するなど、生涯の社会教育活動を推進するに当たり、青少年教育を重視した施策を講じている。

また、県立青少年の家をはじめとする青少年教育施設では、集団による共同生活等を経験する機会の提供と先導的な事業の実施・普及、青少年の交流活動を行うなど、広域的な青少年教育の拠点施設としての役割を果たしている。

学校教育

学校教育においては、自ら学ぶ意欲や社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を目指した教育が行われている。

このことについて、小・中学校学習指導要領総則は、教育課程編成の一般方針の中で、「学校の教育活動を進めるに当たっては、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の指導を徹底し、個性を生かす教育の充実に努めなければならない」「道徳教育を進めるに当たっては、教師と児童及び児童相互の人間関係を深めるとともに、豊かな体験を通して児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない」と示している。

そして、指導計画作成の配慮事項として、「各教科の指導に当たっては、体験的な活動を重視するとともに、児童の興味関心を生かし、自主的、自発的な学習が促進されるよう工夫すること」をあげ、体験的な活動の充実に求めている。

また、岩手県教育委員会の平成8年度『学校教育指導指針』は、学校教育全般にわたる指導の要点の中で、教育課程編成に当たっては「体験的な活動を重視して豊かな人間性を育成すること」、勤労生産・体験学習については「各教科との関連を図る全体構造と指導体制の確立を図ること」「地域や児童生徒の実態に即した勤労生産的な学習の推進に努めること」をあげ、体験的な活動を各教科等をとおして、教育活動全体で展開することを示している。

(1) 青少年の教育の課題

第15期中央教育審議会の第1次答申『21世紀を展望した我が国の教育の在り方』（平8.7）において、今後の教育では学校・家庭・地域社会全体をとおして、子どもたちに「生きる力」をはぐくむことが重視されており、そのためには、子どもと社会全体に「ゆとり」をもたらすことが必要であると提言されている。

「生きる力」とは、自ら課題を見つけ、学び、考え、判断・行動し、問題を解決する資質や能力であり、自らを律しつつ他人と協調し、思いやる心や感動する心など、豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力などのことであり、それらをはぐくむことが、今後の青少年教育の中心的課題となっている。

(3) 学社融合の理念に立った青少年教育の拡充

これまで見てきたように、現代の子どもたちには問題状況ともいえるべきものがあり、その要因の一つとして、体験活動の不足が大きく浮かび上がってくる。

体験活動は、青少年期の発達課題として重要なものであり、これまでも学校教育や社会教育において実施されてきたが、今後、子どもたちの「生きる力」を育成するためには、地域におけるさまざまな生活体験、社会体験、自然体験を活発化することが強く求められている。

このような中で、青少年の家等の青少年教育施設は、これまでも青少年の集団宿泊や自然体験活動の場を提供してきており、その役割は改めて重視されている。

前出、県立総合教育センターの『生涯学習の充実に関する研究』は、学校教育と社会教育の

連携のための推進方策試案として連携モデルの設定を試みている。その中で、今後取り組むべき目標として、学校教育側には「青少年の家等の社会教育施設の活用」を、社会教育側には「社会教育施設によるカリキュラムへの位置づけ」をあげ、さらに、課題として連携モデルの実践化を示している。

そのためには、青少年の家等の施設が、学校との連携・協力を図りつつ、学校教育の中で活用しやすいプログラムや教材を開発し、施設の特徴を生かした事業を積極的に展開していくことが重要になるものとする。

そこで、本研究は、学校教育と社会教育が学習の場や活動など両者の要素を部分的に重ね合わせながら一体となって子どもの教育に取り組んでいこうとする学社融合の理念に立ち、青少年教育の拡充と学習プログラムの開発をするため、青少年の家及び青少年の家を利用した学校を対象に、以下に述べる実態調査を行った。

3 青少年の家における学校利用モデルプログラム開発の基本構想

(1) 調査結果のまとめ

これまで、「青少年の家における学校利用」及び「学校における青少年の家利用」の現状について、調査結果から読み取れる特徴的な事実を中心に述べたが、ここでは、以上の内容を整理し、分析・検討を加えて調査結果のまとめとする。

ア 利用状況

青少年の家の利用については、これまでも全利用者に対する在学青少年の占める割合が減少していることが指摘されていたが、今回の調査でその実態が確認された。

平成7年度の利用状況を4年度と比べると、実利用者数で4,324人(27.9%)、1施設当たり1,441人の減、利用学校数で62校(25.9%)、1施設当たり21校の減少となっている。

また、利用期間は、1泊の利用が増えており、反面、2泊利用が少なくなり、3泊利用は2校だけになっている。

これらの特徴は、特に中学校において顕著である。

青少年の家における学校利用の減少が著しいのは平成5年度であり、平成4年9月から実施された学校週五日制が、平成5年度の学校行事計画に影響を与えたことが学校調査の回答からも確認される。現状において、この傾向は今後も続くものと考えられる。

学校利用の減少や利用期間の短縮化は、青少年の家における児童生徒の活動時間が短くなり、数少ない体験活動の場と機会がさらに失われていくことを意味する。体験活動が、青少年期の発達課題を解決していく上で重視され、青少年教育の重要課題となっていることを考えるとき、子どもたちに、豊かな体験活動の場と機会をどのように保障していくかが今後の課題である。

イ 調査研究、利用促進及び情報提供の状況

青少年の家では、学校の利用促進を図るため、学校や教育委員会に対しての情報提供を積極的に行っている。

その方法は、所報、パンフレット等の送付をはじめ、利用相談・事前打合せや集団宿泊指導者等の研修会の実施、校長会等諸会議での案内説明、さらには学校訪問による利用案内等さまざまな試みられている。

また、「施設利用の実態調査」や「活動プログラム開発」「施設の事業運営等に対するニーズ調査」などの調査研究事業も行われている。

今後の課題として、学校の利用促進や施設の効果的利用を図るために、「学校の施設運営に対するニーズの分析と改善」「施設の利用や活動についての資料や情報の提供」「学習指導要領に則した活動の開発及び情報の提供」「体験学習に必要な教材・教具の整備」等の調査研究を進めるとともに、調査研究に基づいた新たな事業展開を図ることが求められている。

ウ 行事・活動の実施状況

平成7年度に県立青少年の家を利用した小学校は128校、中学校49校、計177校である。

青少年の家の利用目的の第一は、「集団宿泊体験活動」で、小学校61.7%(79校)、中学校(55.1%)である。その対象学年は、小学校では5年(83.6%)、中学校は2年(49.0%)が多い。中学校では1年生の「新入生オリエンテーション」も多い。

また、小学校では2学年以上の複数の学年にまたがった合同実施が多くみられるのも特徴的なことである。

利用期間について、全体の約90%の学校が適切であったと回答している。

平成7年度に利用した学校で平成4年度も同様の行事・活動を行った学校は、小学校が107校、中学校が34校である。その中で、平成7年度の利用期間が短くなっているのは、小学校で21校(19.6%)、中学校で8校(23.5%)となっている。減った泊数は1泊が多い。利用期間が減った理由の第一に「学校週五日制導入による授業時数確保のため」があげられている。

さらに、平成8年度の利用計画をみると、小学校6校(4.7%)、中学校6校(12.2%)で実施日数が短くなっており、小学校14校(10.9%)、中学校4校(8.2%)で実施を取りやめている。なお、今回の調査からその実態は分からなかったが、小学校においては、小規模校の隔年実施があるので、単純に年度比較はできないものと思われる。

活動内容をみると、青少年の家では多様なプログラムが用意されているにもかかわらず、学年を中心とした利用であることから、集団で一斉に研修できる特定の活動に集中している。

企画から実施までの問題点として、「学校での事前指導に時間がかかったこと」「施設との事前打合せや実施踏査のための時間を確保すること」など、事前準備段階に関わる事項をあげている学校が多い。一方、実施段階に関わる事項を問題点としてあげている学校は少ない。このことから、計画を効果的に実施する上で、周到な事前指導が重要な要件となっていることが伺える。

エ 教科等に位置づけた体験的な学習活動の実施について

青少年の家で行った行事・活動を教科の学習に位置づけている学校は、小学校15.6%(20校)、中学校2.0%(1校)と少なかった。

位置づけていない理由は、「特別活動として行うのが適切である」(小学校80.6%、中学校91.7%)という考え方によるところが大きい。

教科等に位置づけた体験的な学習活動を取り入れることについて、小学校72.7%、中学校55.1%が「必要がある」と回答している。

また、「とても期待できる」「ある程度期待できる」教科としては、理科、図画工作・美術、体育・保健体育、家庭・技術家庭、社会、生活科を、80%以上の学校があげており、教科に位

置つけた体験的な学習活動を青少年の家で行う有効性について認めていることが伺える。

今後、教科等に位置つけた体験的な学習活動を取り入れる場合、学校の課題として、「指導内容・指導方法の研究」「評価の研究」「校内運営体制等の整備」「職員の共通理解の促進」などが求められている。

また、学校から求められる青少年の家の課題としては、「施設の効果的な活用等に関する資料や情報の提供」「学習活動の内容や指導方法等の開発」「施設周辺の人材や活動場所等の開発と紹介」「体験的な学習活動に必要な教材・教具の整備」

「施設周辺の人材や活動場所等を開発し、情報提供、紹介等をしてほしい」「施設職員の協力体制の整備」が求められている。

このほか、自由記述回答では、「職員の共通理解を得られる条件整備」「教科の進度と合わせて活用できるメニューの開発」「教科の特性や単元のねらいにそった教科のショートプログラム開発」「異学年集団で実施できる、学年にまたがる総合的カリキュラムの開発」「小学校低学年の利用への対応」「障害児の利用への対応」「養護の知識のある職員の配置」「移動時間と交通経費の問題」「新たな負担増にならないこと」などが課題としてあげられている。

さらに、教科等に位置つけた体験的な学習活動を取り入れることについて、「学習指導要領の改訂なくして、体験的な活動を教科に取り入れることは難しい」という意見や「体験学習は評価になじまないの教科性は出したいくない」「新しい授業スタイルの方向を探ることはできるかもしれないが基礎基本の確保が重要」という意見もあげられている。

(2) 青少年の家を利用した教科に位置つけた体験的な学習活動の推進上の課題

これまでの調査結果のまとめをふまえ、青少年の家を利用した教科に位置つけた体験的な学習活動の推進上の課題を整理すると、次のことがあげられる。

ア 関係者の理解促進

教科に位置つけた体験的な学習活動の推進について、その有効性を認めるものの、青少年の家における行事・活動は特別活動として行うことが適切であるとする学校が多い。これまでの青少年の家の利用の仕方を見直し、学社融合の理念に立った青少年教育の意義と教科に位置つけた体験的な学習活動の果たす役割について、学校教育及び社会教育関係者の理解を図ることが必要である。

イ 推進組織の設置

教科に位置つけた体験的な学習活動を推進するためには、学校内の運営体制や施設職員の協力体制の整備が求められている。学校教育と社会教育の重なる領域について、学社融合の理念に立って一体的に取り組むためには、学校及び青少年の家、さらには市町村教育委員会等行政関係者からなる推進組織の確立が必要である。また、その拠点をどこに置くかが重要課題となるが、当面の推進に当たっては青少年の家に置くことが望ましいものと考えられる。

ウ モデルプログラムの開発

教科に位置つけた体験的な学習活動の推進について、多くの学校でその有効性を認めている。また、少ないながらも教科への位置づけを試みている学校があり、さらには、積極的に取り組

む意欲を示している学校もある。今後、学校教育の中で活用しやすいプログラムや教材を開発し、提供していく必要がある。

エ 調査研究の推進

教科に位置づけた体験的な学習活動の推進について、学校の期待や青少年の家の意欲は高いものの、先行事例はほとんどない状況にある。指導内容や方法、評価をはじめとする解決しなければならない課題についての調査研究が必要である。

オ 施設間の連携・協力

教科に位置づけた体験的な学習活動は、青少年の家以外の施設で行われることも考えられる。さまざまな青少年教育施設や図書館・博物館などの社会教育施設、文化・スポーツ施設等において効果的に推進されるよう、これらの施設間の連携・協力が必要である。

(3) 青少年の家における学校利用モデルプログラム開発の基本構想

ここでは、これまでの調査のまとめと青少年の家における教科に位置づけた体験的な学習活動推進上の課題をふまえ、学校利用モデルプログラムを開発するための基本構想について、次の4つの視点から述べる。

ア 対象学年と利用形態

青少年の家における教科に位置づけた体験的な学習活動を考えた場合、対象学年は「単一学年」と「複数学年」の2つに大別できる。

次に、利用の形態であるが、「宿泊研修」と「日帰研修」の2つがある。

イ 学習活動の内容

青少年の家における教科に位置づけた体験的な学習活動の内容は、「学習指導要領」と「青少年の家の活動プログラム」との2つの要素において決定される。

ウ モデルプログラム開発の手順

モデルプログラムを開発するためには、次の5つの段階があると考えられる。

- (ア) 学習目標の設定
- (イ) 学習活動の計画立案
- (ウ) 学習活動の実行
- (エ) プログラムの評価
- (オ) 発展、応用

エ 学習活動推進の条件整備

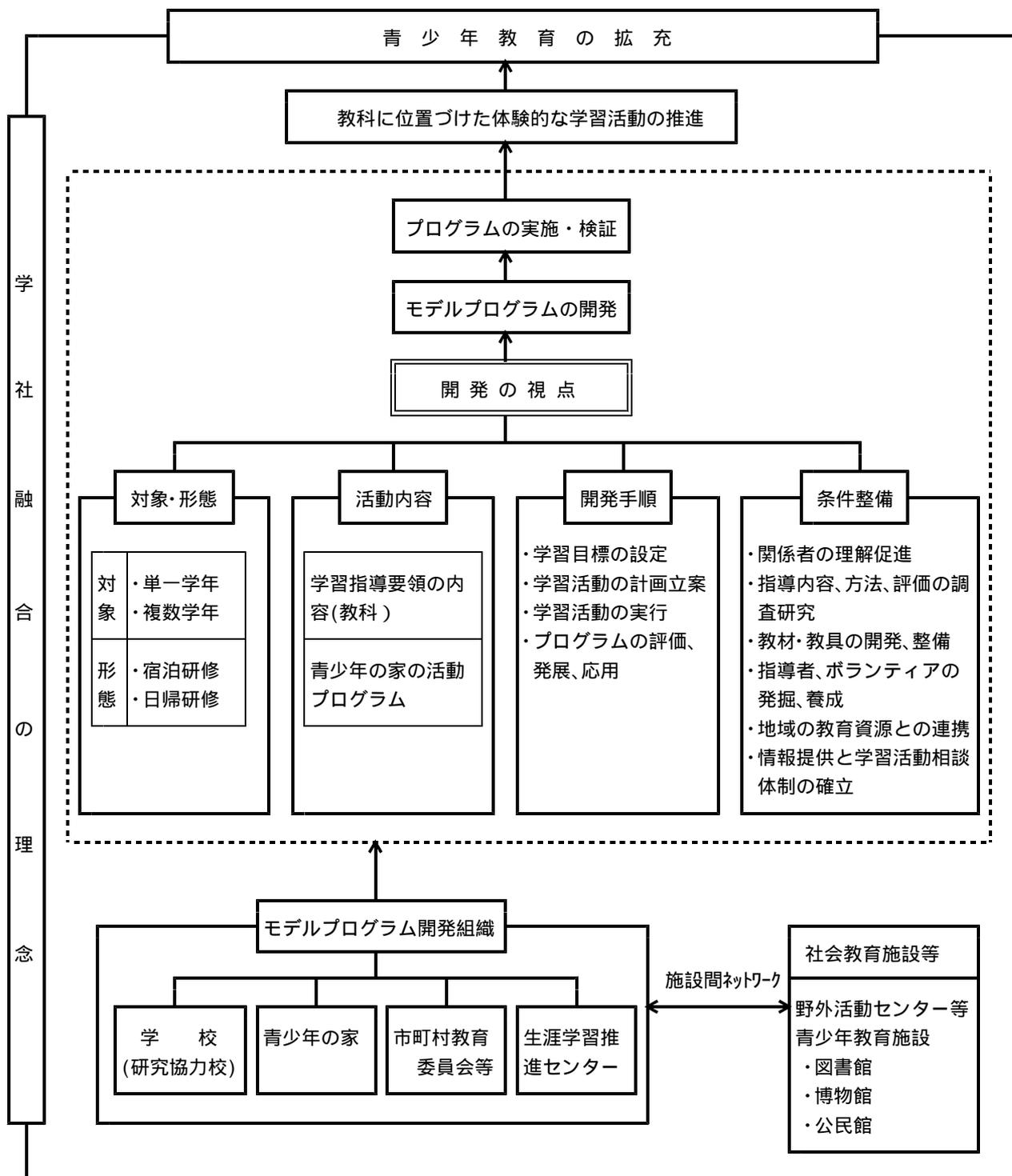
モデルプログラムを効果的なものとして、教科に位置づけた体験的な学習活動を進めるための条件として、次のことが整備される必要がある。

- (ア) 体験学習の指導内容、方法、評価等に関する研究
- (イ) 必要な教材・教具の開発と整備
- (ウ) 施設・設備の整備、充実
- (エ) 指導者、ボランティアの発掘、養成

- (イ) 地域の教育資源との連携
- (カ) 情報提供と学習活動相談体制の確立

図2は、青少年の家における学校利用モデルプログラム開発の基本構想図である。

図2 青少年の家における学校利用モデルプログラム開発の基本構想図



4 モデルプログラム開発のための試案

基本構想に基づき、モデルプログラム開発のための試案を次のようにまとめた。

(1) モデルプログラム開発の基本的な考え方

青少年の家で行われる活動は多岐にわたることから、最初に、基本構想図で示したモデルプログラムの対象及び形態を設定し、その上に立ち協力校を選定する。次に、学校の企画を第一としながら教科に位置づけた活動の展開を図る中で、活動プログラムとその展開案を作成する。

(2) モデルプログラム開発の具体的推進

ア モデルプログラムの対象及び形態の設定

開発するモデルプログラムは、基本構想で示した対象及び利用形態から、次の3つとする。

(ア) 単一学年による宿泊研修のモデルプログラム

1年次研究のまとめでは小学校モデルだけを予定していたが、中学校モデルについても設定する。

このため、中学校指導要領と体験活動との関係の検討を行い、青少年の家の活動プログラムと学習指導要領との関連についてまとめる。

(イ) 複数学年による宿泊研修のモデルプログラム

県内においては小規模校が多く、複数学年が合同で実施する例が見られることから、複数学年モデルについて設定する。

(ウ) 授業形態による日帰り研修のモデルプログラム

県北青少年の家ではプラネタリウムを備えていることから、これを活用した理科授業のモデルを設定する。

イ 研究協力校の選定と依頼

(ア) 選定の視点

研究協力校は、次の3つの視点から選定する。

同一教育事務所管内の学校であること。

宿泊研修事例については、平成9年度に県北青少年の家の利用を計画している学校であること。

なお、前年度の利用において、教科への位置づけが可能な活動プログラムを持つ学校であることに配慮する。

プラネタリウムを利用した理科授業の事例については、県北青少年の家から近距離に位置し、施設バス等を利用し短時間で移動が可能な学校であること。

上記の視点により、研究協力校を表2のとおり選定した。

表2 研究協力校

	学 校 名	モデルプログラムの型
	二戸市立仁左平小学校	プラネタリウム利用の6年理科授業
	軽米町立小軽米小学校	4・5年合同宿泊研修
	一戸町立一戸小学校	5年宿泊研修
	一戸町立小鳥谷中学校	1年宿泊研修

(1) 協力の依頼

青少年の家及び学校への協力依頼は、社会教育及び学校教育に関わる行政組織上の主管が異なることから、関係機関団体への研究事業の周知と、より効果的な推進を図るため、次の手順を進める。

県教育委員会事務局社会教育課、義務教育課、指導課に対する、円滑な事業実施についての指導、協力依頼。

財団法人スポーツ振興事業団に対する、円滑な事業実施についての指導、協力及び施設指導の依頼。

県北青少年の家に対する、事業推進についての協力依頼。

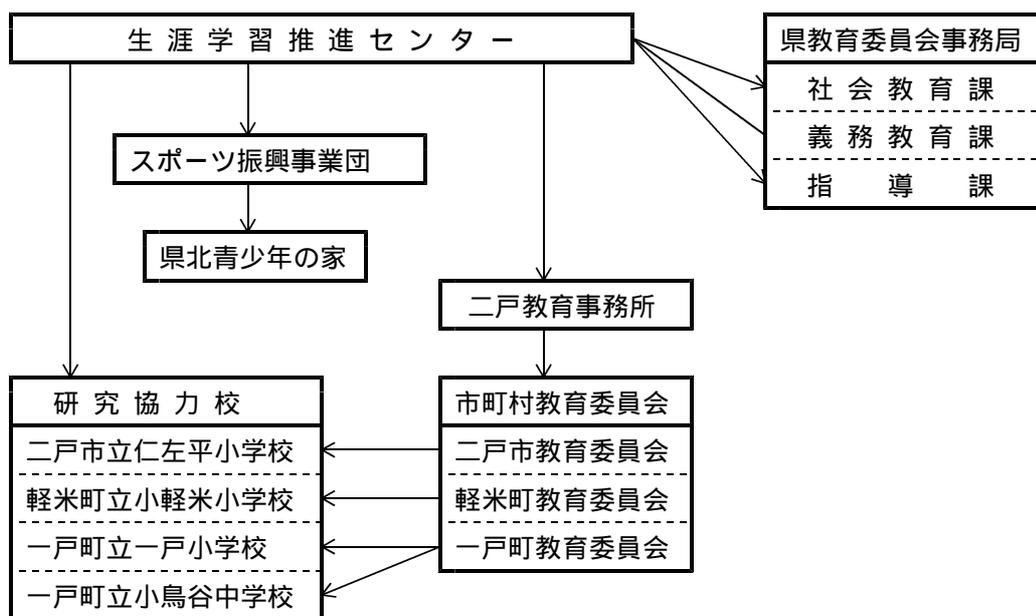
二戸教育事務所に対する、円滑な事業実施についての指導、協力及び関係市町村教育委員会と協力校への指導依頼。

関係市町村教育委員会に対する、円滑な事業実施についての指導、協力依頼。

協力校に対する、事業推進についての協力依頼。

なお、研究協力に関わる関係団体への依頼の流れは、図3のとおりである。

図3 研究協力依頼の流れ



ウ 研究協力者会議及びモデルプログラム開発の推進

基本構想図のモデルプログラム開発組織の考え方をもとに、県北青少年の家及び関係小中学校、二戸教育事務所に協力を依頼し、担当者による打合せ会議を、全体または個別に開催しながら、モデルプログラムの開発を進める。

(ア) 構成メンバー

- 各協力校研修担当教諭
- 県北青少年の家専門職員
- 二戸教育事務所指導主事及び社会教育主事
- 生涯学習推進センター社会教育主事

(イ) 役割分担

モデルプログラム開発に係る四者の役割は、表3のとおりである。

表3 モデルプログラム開発に係る役割分担表

開発の手順	学 校	県北青少年の家	二戸教育事務所	生涯学推進センター
学習目標の設定	(全体指導計画の立案) (年間指導計画の立案) ・学習目標の設定	・施設の教育機能等に関する情報提供 ・教科等に対応するプログラムの開発	・指導、助言(教育課程への位置づけ等)	・教科に位置づけた体験活動に関する情報提供
学習活動の計画立案	・活動プログラムの作成(教科への位置づけ) ・指導案(1単位時間の指導計画～指導内容、方法、留意点、評価などを明示)の作成 ・意識調査(事前)の実施	・プログラム相談、支援(活動内容、方法) ・プラネタリウム機器の操作等に関する説明 ・施設の特色をいかした教科体験活動の教育効果のまとめ	・指導、助言(授業としての取り扱い、指導案等)	・指導内容、方法、評価等に関する調査研究 ・指導資料開発、提供 ・意識調査票(事前、事後)の作成 ・意識調査票の集計、まとめ
学習活動の実行	・指導実践	・指導支援	・参観、指導、助言	・参観、記録
プログラムの評価	・意識調査(事後)の実施 ・事後の観察、指導(感想文等) ・教科学習終了後の全体評価 ・成果、課題のまとめ	・成果、課題のまとめ	・成果、課題のまとめ	・意識調査票の集計、まとめ ・成果、課題のまとめ
発展、応用	・年間指導計画への位置づけ ・プログラムの総合化(教科にまたがる総合的体系化)	・プログラム開発 ・教材開発 ・指導者、ボランティアの発掘、養成 ・地域の教育資源との連携	・関係者の理解促進(学校教育、社会教育関係者、市町村教委等)	・社会教育関係施設における教科に位置づけた体験的な学習活動の推進に関するまとめ

(ウ) 推進計画

a 全体会議

全体会議は2度開催する。最初に研究事業の概要説明及びプログラム開発、指導実践に向けた役割分担の確認を行い、最後に研究事業の成果と課題についてのまとめを行う。

b 個別打合せ会

第1回全体会議以後は、各学校ごとに打合せを行う。当日までの流れは、次のとおりとする。

学校は、教科に位置づけた活動内容を含む活動プログラムの素案を作成する。

生涯学習推進センターは、素案をもとに、教科に位置づけた活動の展開例を示す。

学校は、展開例を参考に、活動プログラム及び教科に位置づけた活動の展開案を作成する。

学校と青少年の家は、活動プログラム及び活動展開案をもとに、指導役割分担、活動場所や準備するもの等について検討、協議する。

なお、推進日程は、表4のとおりである。

表4 推進日程表

項目	期 日	内 容
全体会議	5月 7日	研究概要の説明及び役割分担の確認
個別打合せ	6月～10月	活動プログラム及び活動展開案の検討 学校による素案作成 生涯学習推進センターによる展開例の作成 学校による展開案の作成 学校、青少年の家、推進センターによる検討、協議 (打合せ会：6/4小軽米小、6/27小鳥谷中、9/5一戸小、10/14仁左平小)
活動実践 (当日)	6月12日～13日	小軽米小学校4・5年宿泊研修
	7月 8日～10日	小鳥谷中学校1年宿泊研修
	9月11日～12日	一戸小学校5年宿泊研修
	11月 5、6、7日	仁左平小学校6年理科(プラネタリウム)授業
全体会議	12月 9日	評価とまとめ

5 モデルプログラムと活動実践の分析・考察

試案に基づき作成した活動プログラム及び活動展開案、活動実践の分析と考察は、次のとおりである。

(1) 事例1「単一学年による宿泊研修 ～小学校5年宿泊研修～」

ア 概況

学 校 名	一戸町立一戸小学校					
期 日	平成9年9月11日(木)～9月12日(金) 1泊2日					
目 標	共同生活を通して、みんなでやることの素晴らしさ、楽しさを体験させるとともに、社会性、協調性、規律を尊重する態度を育成する。					
参 加 者		児 童 ・ 生 徒		引率教員	ボランティア等	計
		5 年	小 計			
	男	2 3	2 3	2		2 5
	女	2 2	2 2	3		2 5
	計	4 5	4 5	5		5 0

イ 研修活動プログラム

第 一 日	9:30 10:00		12:00 13:30		15:30 17:10		19:00 21:00	
	出 会 い の つ ど い	野外炊事	昼 食	ウォークラリー	望遠鏡作り	夕 食	プラネタリウム 月の観察 VTR視聴 理科	
第 二 日	7:30 9:30		12:00 13:00		14:00			
	朝 食	バス移動 創作活動「竹細工」 社会	昼 食	創作活動 「竹細工」 社会				

ウ 活動展開案

(ア) 月の観察指導案

- 1 日時 9月11日 15:30~17:10 19:00~21:00
- 2 活動名 月の観察
- 3 教科名 理科
- 4 単元名 太陽と月の動き
- 5 単元の目標
太陽は1日の間にどのように動いているかに興味を持ち、太陽の高さと方位を調べ1日の動きをとらえることができるようにする。次に、午後に南東に見える月の動きに興味を持ち、位置の変化を調べて、月は太陽と同じように東から西へと動き、太陽との位置関係によって形が変わって見えることや、月と太陽の表面のようすには違いがあることをとらえることができるようにする。
- 6 単元の指導計画
第1次 太陽はどのように動いているか 2時間
第2次 月はどのように動いているか 2時間/本時
第3次 月の形はなぜ変わって見えるのか 2時間
第4次 太陽と月は違うか 2時間
- 7 本活動の指導
午後に南東に見える月の動きを観察し、月の動きを太陽の動きをもとに予想し、月の位置を観察して記録することができる。
- 8 本時の展開

活動項目と時間の目安	学 習 活 動	支 援・評 価 (T ₁ 担任、T ₂ 講師)
講師紹介と説明 100分	1 天体望遠鏡の作り方を聞き、製作する。	T ₁ 講師を紹介する。 T ₂ 天体望遠鏡の作り方について説明する。
観察活動	2 本時の学習課題を把握する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">月の動きや表面の観察をしよう</div>	活動内容に関心を持ち、意欲的に活動しようとしているか。
	3 南東の空に見える月を観察する。	
	4 月はどのように動いているかを話し合う。	T ₁ 太陽の動きをもとに予想させる。 T ₂ 予想がつかない子どもには例を与えて考えさせる。
	5 月の動きを調べるための方法を考える。	T ₁ 目印を決めて位置関係で月の動きをつかませる。
	6 月の位置を調べて記録する。	T ₂ 頭を動かさないように注意し、観察させる
	7 月の表面はどのようになっているかを考える。	
	8 天体望遠鏡で月の表面を観察する。 (雨天の場合、プラネタリウムで観察する)	T ₁ 天体望遠鏡で観察させる。
120分	9 観察した結果を発表する。	月も太陽と同じような動きをすることが分かったか。

(イ) 創作活動「竹細工」指導案

- 1 日時 9月12日 9:30~12:00 13:00~14:00
- 2 活動名 創作活動「竹細工」(一戸町鳥越)
- 3 教科名 社会
- 4 単元名 4 伝統に生きる工業
- 5 単元の目標
我が国の伝統的な技術を生かした工業について、それが盛んな地域や生産物を地図や資料などで調べて原料や土地の条件、技術などを生かして生産していることを理解することができるようにするとともに、伝統的な技術を生かした工業製品の持つ意味を考え、これからの伝統的な技術を生かした工業の発展に関心を持つことができるようにさせる。

6 単元の指導計画

オリエンテーション	4時間 / 本時
一戸町鳥越の竹細工 (体験学習)	(4)
(1) 岐阜県的美濃紙作り	3時間
和紙作りのふるさと	(1)
伝わる技術とささえる条件	(1)
伝える技術と問題点	(1)
(2) 各地に見られる伝統工業	2時間
いろいろな伝統工業	(1)
わたしたちのくらしと伝統工業	(1)

7 本活動の指導

実際に竹細工作りを体験し、手作りの難しさや苦勞について気づくことができる。

8 本時の展開

活動項目と時間の目安	学 習 活 動	支 援・評 価 (T ₁ 担任、T ₂ 講師)
講師紹介と 講話 30分	1 鳥越の竹細工についての話を聞く。 メモを取りながら聞き、後日の学習に生かさせる。	T ₁ 講師を紹介する T ₂ 鳥越の竹細工の歴史とその苦勞などについて話す。
創作活動 160分	2 本時の学習課題を把握する 竹細工にちょうせんしてみよう	竹細工に関心を持ち、意欲的に活動しようとしているか。
	3 作り方の説明を聞く。 作り方を聞きながら、自分の作りたいもののイメージをふくらませる。	T ₂ 作り方を説明する。 T ₁ 制作補助
	4 竹細工に挑戦する。	T ₂ 作りたいものが決まらない子に構想の支援をする。 自分の構想にそって、自分なりに工夫して楽しんで作業をすることができたか。
発表 20分	5 出来上がった竹細工を鑑賞し合いながら竹細工作りの苦勞や楽しかったこと、作品に対する感想を発表し合う。	T ₁ 作りあげる過程での苦勞や楽しかったことから、竹細工に携わる人たちの気持ちを考えさせる。 出来上がった作品を見て、竹細工に携わる人たちの苦勞や喜びに気づくことができたか。

エ 分析と考察

宿泊研修の実施日は前年度に決められている中で、青少年の家での活動を年間指導計画に都合よく位置づけることが課題であった。そこで、学校でできないもので教科に位置づけることのできる活動は何かを第一に考え、プラネタリウムと月の観察、地元伝統工芸の竹細工を行うこととした。そのため、理科は月の単元に入れるように太陽学習の進度を早め、社会は公害の単元と入れ替えるなど年間計画を組み替えて実施した。

(ア) 月の観察

a 活動概要

活動計画は、南東の空を観察し、太陽の動きをもとに月の動きを予想させ、1時間ごとに月の位置を観察・記録する予定であったが、曇天のため次のように変更して実施した。

青少年の家職員の指導により、牛乳パックにレンズを取り付けた望遠鏡作りを行い、天体学習への意欲づけとする。

プラネタリウム室で、当日の南東の空を映し出し、月の動きを太陽の動きをもとに予想させたのち、月と太陽の動きを確認させる。

ボールに光を当て、その位置関係により光と影の形が変化することを確認せる。

月の学習ビデオ（NHK教育テレビ）を視聴し、学習のまとめとする。

b 成果及び今後の課題

学校と青少年の家との打合せが緊密に行われ、活動のねらいと内容についての共通理解のもと、両者が一体となった取り組みが展開できた。

各活動段階における両者の役割分担が明確化され、チームティーチングによる効果的な指導が行われた。

望遠鏡作りでは「遮光板をつければ太陽を見ることができるか」「青少年の家に来るといつでも星の観測ができるのか」など活発な質問が飛び出し、天体への興味の喚起と学習への意欲づけが十分できたものと考えられる。

プラネタリウムでは、天空を再現することにより、曇天のためできなかった観察の疑似体験ができ、予定した内容の学習ができた。

投影機による説明では、月の形が太陽との位置関係によって変わることにについて具体的に理解を図ることができた。

事後に行った児童へのアンケートでは「月は太陽の光で光っていること」「太陽も月も東から西へ進むこと」「太陽が遠くにあるので月と同じ大きさに見えること」についての理解が図られていることが確認された。

また、「望遠鏡はなぜ逆さまに写るのだろうか」「なんで地球の月だけなんだろう」といった新たな興味・関心を呼び起こす効果があった。

(1) 創作活動「竹細工」

a 実施概要

一戸町鳥越「もみじ交遊舎」に会場を移動し、交遊舎所長を講師に、竹細工の歴史やその苦労などについての講話を聞く。

交遊舎所属の地元講師4名の指導により竹細工を行う。基本型はペン立てであったが、子どもたちは工夫をこらし、それぞれ個性ある作品を仕上げた。

b 成果及び今後の課題

青少年の家から会場を移動しての活動であったが、青少年の家バスによる速やかな移動、十分な事前打合せと準備に基づく地元講師の指導により、効果的な展開を図ることができた。

地域の素材や人材を活用することにより、指導内容をリアルで豊かなものとしてでき、児童の興味・関心を高めることができた。

アンケートでは「竹を編むのがおもしろかった」「竹を巻いていくことがとても難しく、右の人差指がとても痛かった」「昔の人は当たり前のようにやっていたのかなと想像した」「最後に縁を編むとき竹が硬くて大変だったが水で濡らすとやりやすくなった」などの回答があり、地域の素材や人材とふれあう体験的な活動により、児童の心情を高め、主体的な学習の仕方を身につけさせ、学ぶ楽しさや成就感を体得させることができたものと思われる。

地域の素材や人材を活用した活動は、学校及び青少年の家の指導者が持ち合わせていない生活体験や技術を補充する効果が大きいことから、今後、青少年の家では、周辺にある教育資源情報を収集・活用することにより、その活動に新たな展開が図られるものと思われる。

(2) 事例2「単一学年による宿泊研修 ～中学校1年宿泊研修～」

ア 概況

学 校 名	一戸町立小鳥谷中学校						
期 日	平成9年7月8日(火)～7月10日(木) 2泊3日						
目 標	1 校外における集団生活を通して、お互いの良さに気づかせ、仲間作りと学級の団結を深めさせ、充実した中学校生活を送れるようにさせる。 2 校外における集団生活を通して、規律ある生活態度を身につけさせる。 3 体験学習を通し、授業での学習内容をより確実なものにさせ、意欲を持たせる。						
参 加 者	児 童 ・ 生 徒			引率教員	ボランティア等	計	
	1 年		小 計				
	男	1 0		1 0	1		1 1
	女	1 6		1 6	1		1 7
	計	2 6		2 6	2		2 8

イ 研修活動プログラム

第 一 日			13:30	14:00	15:00	17:10	18:30	20:00	
				出 会 い の つ ど い	テント設営	野外炊事	夕 食	キャンプ ファイヤー 体育	
第 二 日	7:30	9:00	10:30	12:00	13:30	16:30	17:10	18:30	20:00
	朝 食	テント撤収	プラネタ リウム	昼 食	オリエンテーリング		夕 食	ニュー スポーツ	スターウォ ッチング 理科
第 三 日	7:30	9:00	12:00	13:30	15:00	15:30			
	朝 食	創作活動「七宝焼」	昼 食	新聞作り	別 れ の つ ど い	退 所			

ウ 活動展開案

(ア) プラネタリウム、スターウォッチング指導案

1	日 時	7月9日	10:30～12:00	20:00～21:00
2	活動名	プラネタリウム、スターウォッチング		
3	教科名	理科		
4	単元名	地球と太陽系		
5	単元について	身近な天体の観測を通して、地球の運動について考察するとともに、天体としての月・太陽及び地球の特徴について理解させ、太陽系についての認識を深める。		
6	単元全体の指導計画	身近な天体の学習から始め、段階的に学習を進める。「身近な天体」「星や太陽の動きと地球の運動」「太陽系」と学習していく。		
7	本時の目標	天体学習の導入として、夏の代表的な星座や天体の動きについて知り、天体に対する興味・関心を高める。		

8 本時の展開

	活動内容	学習内容	指導担当	実施上・指導上の留意点
導入	・ドーム内での観察方法を知る	プラネタリアムの方角・天頂・地平線を知る。 ・星の明るさ、色について観察する	青少年の家職員	話の聞き方について話す。 できるだけ北側に着席させる
展開	・夏の空の星の動きを観察する	当日の夜の星空を知る。 ・夏の大三角形 ・主な星座の見つけ方 ・当日見える惑星(火星、木星、土星)星の動きについて知る。 ・各方位の星の動き ・1日の星の動き、1年間の星の動き	青少年の家職員	小学校の学習や実際の星空を思い出させる。 自分でも星空を見ようという意欲を持たせる。
終結	・全天の星の動きをまとめる ・まとめ		青少年の家職員	スターウォッチングの時確かめようと意欲づける。

(イ) 野外活動、オリエンテーリング指導案

- 1 日時 7月9日 13:30~16:30
- 2 活動名 野外活動、オリエンテーリング
- 3 教科名 保健体育
- 4 単元名 野外活動、オリエンテーリング
- 5 単元について
野外活動の特性を知り、自然と調和していろいろな活動を楽しむことができる。また、自然の厳しさを理解し、マナーや安全に注意して活動できる。
すべての人々が生涯にわたって親しめるスポーツ・レクリエーションである。
- 6 単元全体の指導計画
 - ・生涯スポーツの行い方(意義、行うために) 1時間
 - ・計画(グループ作り、役割分担、持ち物、計画の確認) 1時間
 - ・オリエンテーリング 本時
 - ・事後指導 1時間
- 7 本時の目標
 - ・判断力、推理力、行動力を養い、体力の増進を図る。
 - ・活動を通して、自然を大切にすると、安全に留意する態度を身につける。
 - ・協力して目的を達成することによって得られる自信と、成就感を持たせる。
- 8 本時の展開

	活動内容	学習内容	指導担当	実施上・指導上の留意点
導入	オリエンテーリング用具の準備	・オリエンテーリングの概要を知る ・用具の準備 ・役割分担の確認	青少年の家職員	・ポイントをおさえながら話を聞く ・係が動く。
展開	班の確認 出発 オリエンテーリング 成績発表	・磁石の使い方、地図の見方の確認 ・班ごとの作戦(コースの回り方) ・班員そろってゴール・ゴール後、計算をし、成績を出す。 ・成績発表	青少年の家職員 引率教師 レク係	・班で行動する。 ・危険箇所を確認。 ・手際良く協力しながら、ポストを見つめる。 ・迷いそうな所に立っている。 ・自然破壊をしないように歩く。 ・安全に留意しながら歩く。 ・ゴールしたらすぐ計算する。
終結	まとめ	感想発表 各班ごと	青少年の家職員	・他の班の発表をきちんと聞く

(ウ) 屋内ニュースポーツ指導案

- 1 日 時 7月9日 18:30~20:00
- 2 活動名 ニュースポーツ
- 3 教科名 保健体育
- 4 単元名 生涯スポーツ(ニュースポーツ)
- 5 単元について
自由時間が増大する中、豊かな余暇生活を送らせるため、いろいろな運動に積極的に参加し運動の楽しさや喜びを味わい、生涯スポーツを実現するための意欲づけの一つとする。
特にニュースポーツには独特のおもしろさがある。
- 6 単元全体の指導計画
 - ・生涯スポーツの意義.....1時間(授業の中で)
 - ・ニュースポーツ.....2時間(青少年の家の施設を利用して)
 - ・事後指導.....1時間(授業の中で)
- 7 本時の目標
 - ・授業で学習したことを体験することにより、より確かなものにする。
 - ・ユニカール、シャッフルボードの特性を知り、ニュースポーツの独特のおもしろさを味わう。
 - ・協力し合いながらスポーツの持っている楽しさや喜びを味わう。
- 8 本時の展開

	活動内容	学 習 内 容	指導担当	実施上・指導上の留意点
導 入	・ユニカール の説明	ユニカール、シャッフルボードの特性とルールについての説明を聞く	青少年の家 職員	初めてのスポーツなので説明をよく聞く
展 開	・ゲーム	試しのゲーム ・やり方を理解する ゲーム ・協力し合いながら行う ・進め方を確認し合いながら行う	青少年の家 職員 引率教師	自分から進んでプレーできるようにさせる 進め方を確認しながらプレーさせる 互いにアドバイスできるようにさせる
終 結	・まとめ	感想発表	引率教師	各チーム一人に発表させる

エ 分析と考察

中学1年生を対象とした、新入生オリエンテーションの目的を持つ宿泊研修であることから、授業とどうつなげるかが課題であった。

そこで、教科に位置づけながらも年間指導計画とは直接関係なく実施することとし、プラネタリウムとスターウォッチングは理科の天体学習への動機づけとし、野外活動とニュースポーツは体育の生涯スポーツ、安全教育の視点に立って展開した。

(ア) プラネタリウム・スターウォッチング

a 活動概要

青少年の家職員がプラネタリウムを操作し、当日の星空を映し出し、夏の代表的な星座や天体の動きについて説明、指導した。スターウォッチングは、荒天のため中止とした。

b 成果及び今後の課題

研修後、日常生活の中で夜空を注意して見る生徒が増え、木星を見たとか今何の星座が出ているといったことが学校で話題となり、授業で星の話をする反応が返ってくるようになったことから、天体に興味・関心を持たせる契機となったものと考えられる。

アンケートでは「プラネタリウムの星はすごくきれいで説明も分かりやすく、たくさんのお話を学んだ」といった回答が見られ、学習の導入段階におけるプラネタリウムの視聴覚的效果が確認できた。

宿泊研修と学校での授業とに間隔があったため、その成果が見えにくくなった。年間指導計画との関連づけや授業へのつなげ方の検討が必要である。

今回の研修では、引率指導者に理科の教科担任が加わっていなかったため、当該時間に来て指導に当たることも検討したが、実現できなかった。中学校は教科担任制であることから、教科担任と引率指導者が重ならない場合、計画立案から実施、評価までをどう進めるかが今後の課題となった。

(イ) 野外活動・オリエンテーリング

a 活動概要

青少年の家の職員の指導のもと、テント設営、野外炊事、キャンプファイヤー、テント撤収、ポストオリエンテーリングを行う。

b 成果及び今後の課題

学校の授業では教科書による学習だけで終わらせてしまう单元であるが、文字で学んだことを体験的に学習することによって、より確実なものとして身に付けさせることができた。

アンケートでは「大人になってもキャンプを楽しみたい」「青少年の家の人のようなことをしたい」などの回答があり、生涯にわたって親しめるきっかけづくりになったものと思われる。

共同生活による野外活動を通し、目標を持ち、仲間と協力して達成できる成就感や喜びを持たせることができ、判断力や行動力、協調性を養うことができたものと思われる。

指導内容、方法、評価について、研究が必要である。

(ウ) 屋内ニュースポーツ

a 活動概要

ユニカール、シャッフルボードの特性とルールについて青少年の家職員が説明した後、引率者（体育教科担任）の指導のもと競技を行う。

b 成果及び今後の課題

アンケートでは「ニュースポーツは初めての体験であったが、コツをつかみ楽しめた」「楽しいのでもう一度やってみたい」「体育はすごく憂鬱だが、今回はみんなで助け合い、楽しみながら活動できた」といった回答が多くあり、「協力し合いながらスポーツの持っている楽しさや喜びを味わう」というねらいが達成できた。

(3) 事例3「複数学年による宿泊研修 ～小学校4、5年宿泊研修～」

ア 概況

学 校 名	軽米町立小軽米小学校						
期 日	平成9年6月12日(木)～6月13日(金) 1泊2日						
目 標	<ul style="list-style-type: none"> ・集団生活を通して、友情を深めるとともに、規則尊重の態度や社会性を養う。 ・諸活動を通して、理科や社会、図工等の学習を深める。 						
参 加 者	児 童 ・ 生 徒			引率教員	ボランティア等	計	
	4 年	5 年	小 計				
	男	10	6	16	3	1	20
	女	4	2	6	1	0	7
	計	14	8	22	4	1	27

イ 研修活動プログラム

第一日	入所式	9:30	10:00	11:00	12:00	13:30	14:00	16:00	17:10	18:30	20:00
		自然観察	自然観察	プラネタリウム	昼食	自然観察	ウォークラリー	自然観察	夕食	キャンプファイヤー	自然観察
		天体観察 自然観察	理科	天体観察	理科	天体観察	理科	天体観察	理科	天体観察	理科
第二日	朝食	7:30	9:00	12:00	13:30	15:00	15:20	15:40			
		創作活動 「焼き物（粘土細工）」	昼食	講話 ・ネイチャーゲーム	レクリエーション	退所					
		天体観察 函工	食	植林 社会							

ウ 活動展開案

(ア) 自然観察指導案（4年生）

1	日時	6月12日	10:00～11:00	13:30～14:00	16:30～17:10	20:00～20:30
2	活動名	草花の花の開閉と木の水の流れるようすの観察				
3	教科名	理科				
4	単元名	生き物の一日と人のからだ				
5	単元の目標	<p>花が開いているのは1日のいつごろかに興味を持ち、時刻による花の開閉や虫などの動物の活動のようす、天気による花の開閉や動物の活動のようすを調べ、それぞれに変化するものがあることをとらえことができるようにする。</p> <p>また、人の1日の活動や運動による脈拍数や体温の変化を調べ、人のからだには一定のリズムがあることをとらえることができるようにする。</p>				
6	単元全体の指導計画					
	第1次	生き物のようすの1日の変化	3時間			
		草花の花の1日の変化	(2)	本時1/2		
		虫の活動の1日の変化	(1)			
	第2次	生き物のようすと天気の変化	2時間			
		雨の日の草花や虫などのようす	(1)			
		植物の成長と天気の変化	(1)			
	第3次	人の1日の活動	4時間			
		人の1日の活動のようす	(1)			
		運動とからだのようすの変化	(2)			
		学習のまとめ	(1)			
7	本活動の指導					
		単元との関連と本活動のねらい				
		指導計画の第1次、生き物のようすの1日の変化の第1時、第2時では、草花の1日の変化について晴れた日の朝、昼、夕方に観察したことをもとに変化のようすの特徴をとらえることになっている。				
		本活動では、同じ草花の朝、昼、夕方の変化のようす、種類により花のようすの変化を実際に観察し草花の花の開閉時刻に興味を持って、進んで草花のようすを観察しようとする意欲と態度を養う。				
		活動の実際例				
		晴れた日の朝、昼、夕方に花が開いているかどうかを調べる。				

8 本時の展開

学習過程と時間の目安	子どもの活動・学習内容	子どもの活動に対する教師の 支援と 評価
30分	<p>《提案1》～どの草花も、花は1日の中の同じところに開いているのだろうか～</p> <p>たんぽぽやおシロイバナなどは、いつごろ咲いていると思うか、経験や予想を話し合う。</p>	<p>たんぽぽは、昼間開いて朝や夕方は開いてない。おシロイバナは昼間閉じて、朝や夕方に開いている。</p> <p>草花の花は、いつ開いているのか班で積極的に話し合うことができる。</p>
100分	<p>《提案2》～晴れた日の朝、昼、夕方に花が開いているかどうかを調べてみよう～</p> <p>まず、自分が調べる草花を決める。観察対象はたんぽぽと施設内の中から好きな花を一つ選ばせる。</p> <p>自分の決めた草花の花の絵を描き、その特徴を記録する。</p> <p>(10:20、13:30、16:30にそれぞれ30分間観察する)</p>	<p>同じ株の花を観察できるように、草株にひもをかけて印をつける。</p> <p>草花の花の開閉時刻に興味を持って調べ観察することができたか。</p>
30分	<p>《提案3》～草花の花に、みんなで電灯の光を当てたらどうなるだろうか～</p> <p>たんぽぽなど昼に開いている草花の花にみんなの懐中電灯を当ててみる。そして当てていないたんぽぽと比較観察する。</p> <p>(キャンプファイヤー後30分間観察する)</p> <p>(時間限定をして15分、30分、45分、60分としてみるのもいいかも)</p>	<p>「たんぽぽは僕たちにだまされるだろうか実験してみよう」</p> <p>興味を持って実験に参加し、観察することができたか。</p>

評価の観点

草花の花の開閉時刻に興味を持ち、調べる草花と時刻を決め、進んで草花のようすを観察して記録しているか。

(1) 創作活動「焼き物(粘土細工)」指導案(4年生)

- 1 日時 6月13日 9:00~12:00
- 2 活動名 きみはねんどのマジシャン
- 3 教科名 図画工作
- 4 単元名 いろいろな表し方を身につけよう
- 5 単元の目標
見たこと、感じたこと、想像したことを絵や立体に表すことができるようにする。
- 6 単元全体の指導計画

絵の具遊びの工夫から想像して、絵にする	6時間	
造形遊び(細い材料で)	2時間	
紙を材料にして、本物に似せて作る	6時間	
簡単な仕組みから動きの特徴を生かして作る	4時間	
木を切り、組み合わせを考えて、思いついたものを作る	4時間	
粘土の板やひも、団子から想像したことを、立体に表す	2時間	本時 2 / 2
- 7 本活動の指導

単元との関連と本活動のねらい

手や腕を十分に使って粘土の特性に触れ、偶然にできる形や空間から想像を広げたり、自由につないだり組み合わせたりして生まれてくる形やイメージを楽しむことができる。

活動の実際例

粘土を使って立体に表す

8 本時の展開

学習過程と時間の目安	子どもの活動・学習内容	子どもの活動に対する教師の 支援と 評価
15分	<p>《提案1》～使いやすいステージを作りましょう～</p> <p>粘土板 2枚、ぬれぞうきん、へら、ろくろ 粘土 1人約1.5kgを用意</p>	<p>「自分のこぶし大のものを5～6個くらい 1枚の粘土板に乗せる」 段取りを考えながら準備する。</p>
30分	<p>《提案2》～粘土と遊ぼう～</p> <p>「へび作り競争」両手で粘土を伸ばして その長さを競う。 「宝隠し、宝探し競争」団子とへびをあ わせた粘土の塊にビー玉2個を隠す。 隣の人の粘土の塊からビー玉2個を見つ け出し、合図をする。</p>	<p>「長いへびをつくろう。太さは自由です」 制限時間は3分間 「ビー玉を1人2個配ります。見つからな いように粘土の塊の中に隠してください」 制限時間は1分間 「隣の人と交換して、宝物を探そう。早く 2個見つけた方が勝ちです」 粘土遊びを通して基本的技法を習得する</p>
105分	<p>《提案3》～世界に1つしかない不思議なものを作ろう～</p> <p>粘土の特性を生かし、自分のイメージを ふくらませて自由に物を作る。 用意した粘土はなるべく残さないで使う ようにする。</p>	<p>「どこの店にいても売っていないような ものを作ってみよう」 粘土の特性を生かして、ユニークな形を追 求している。</p>
30分	<p>《提案4》～さて、作品発表会をしましょう。かけた布をサット引いて見せて下さい～</p> <p>順番に布をかけ、見せていく。その時一 言コメントを添える。 実際に焼く窯を見た後、乾燥室に作品を 移動する。</p>	<p>自分なりの思いを込めて楽しく作品を作り 友だちの作品も見る。</p>

評価の観点

手を十分に働かせ、粘土の特性や感触を積極的に味わいながら、想像を広げている。
形や空間から想像を広げたり、想像を積み重ねながら作っている。
友だちのマジシャンぶりを作品を通して味わう。

(ウ) 講話、ネイチャーゲーム、植林指導案(4年生)

- 1 日時 6月13日 13:30～15:00
- 2 活動名 水をつくりつづける
- 3 教科名 社会
- 4 単元名 浄水場をたずねて
- 5 単元の目標
市町村では、地域の人々の健康な生活を保っていくために、人々の願いを生かしながらごみの収集や処
理、水質の確保や新しい水源の確保などを計画的に行っていることをつかむ。
- 6 単元全体の指導計画

第1次	ごみはどこへ	6時間
第2次	水はどこから	10時間
	水のあるくらし	(3)
	浄水場をたずねて	(4) 本時4/4
	下水のゆくえ	(3)
第3次	紙芝居をつくろう	1時間
- 7 本活動の指導
単元との関連と本活動のねらい
これからの水道について、使用料の増加にあわせた水源の確保だけではなく、限られた資源として水

を大切に使う心がけや暮らし方が必要なことを理解できるようにする。

活動の実際例

植林をして、森林を守り、水を確保しよう

8 本時の展開

学習過程と時間の目安	子どもの活動・学習内容	子どもの活動に対する教師の 支援と 評価
10分	《提案1》～森林はどんなはたらきをしているか～ 森林のはたらきを調べる。 ・雨水をたくわえる ・土や砂が流れ出すのを防ぐ	森林には、水源滋養のはたらきがあることをおさえる。 「森のなかには僕たちが知らないはたらきももっとあるかもしれないぞ」
45分	《提案2》～森の博士にご対面～ 施設ボランティア 夏井嘉一郎さん登場 森のはたらきや僕たちの知らない木の不思議など何でも聞いてみよう。 ・緑のダムとしての働き ・森の中はクーラー etc	森林について、興味を持って話を聞き、いろいろな質問ができるか。
10分	《提案3》～木の鼓動を聞いてみよう～ みずきなどの比較的水の流れが聞きやすい木を選んで、聴診器で聞いてみる。	「どんな音が聞こえてきますか。そしてそれはどんな音に似ていますか」
30分	《提案4》～青少年の家に木を植えよう～ 植林作業 場所 炭焼き小屋の上方 用意するもの 苗木(24本) スコップ(10) バケツ(5)	植林作業を積極的に行えたか。

評価の観点

水を大切に生活の仕方や工夫を考えることができたか。

水は限りある資源であり、大切に使わなければならないものであるということが理解できたか。

(I) 天体観察指導案(5年生)

1	日 時	6月12日	10:00～10:15	11:00～11:05	12:00～12:05	13:00～13:20
			16:00～16:05	16:30～17:10	18:30～18:40	
		6月13日	8:00～8:05	11:00～11:05		
2	活動名	天体観察とプラネタリウム				
3	教科名	理科				
4	単元名	太陽と月の動き				
5	単元の目標	太陽は1日の間にどのように動いているかに興味を持ち、太陽の高さと方位を調べ、1日の動きをとらえることができるようにする。 次に、午後に南東に見える月の動きに興味を持ち、位置の変化を調べて、月は太陽と同じように東から西へと動き、太陽の位置関係によって、形が変わって見えることや、月と太陽の表面のようすには違いがあることをとらえることができるようにする。				
6	単元全体の指導計画(7時間扱い)					
	第1次	太陽と月はどのように動いているか				4時間
		太陽と月の動きを予想し、記録の仕方を話し合う	(1)			
		太陽と月の動きを観察する	(2)			/本時
		太陽と月の動きをまとめる	(1)			/本時
	第2次	太陽と月は違うか				1時間/本時
	第3次	月の形はなぜかわって見えるのか				1時間

第4次 学習のまとめをする

1時間

7 本時の目標

- ・太陽と月の表面のようすに興味を持ち、進んで観察しようとする。 《関・意・態》
- ・太陽と月が東から南の空を通過して西に動いていると考えることができる。
- ・月の形が違うわけを、太陽の方向と月の位地とを関係づけて考えることができる。《思考》
- ・太陽の位置を観測器具を用いて正しく測定し、記録することができるか 《技・表》

8 本時の展開

活動項目	学 習 活 動	支 援 ・ 評 価
天体観察	太陽位置測定器を使い、方位と高さを調べ、記録用紙に記入する。	<ul style="list-style-type: none"> ・全員が正しく測定、記録できるように支援する ・体感的にとらえたことや表面のようすなどについて観点を与えながら自由に発表させる。 ・目を痛めないようにするなど正しい使い方で天体望遠鏡を扱うように配慮する。 ・太陽の表面のようすに興味を持ち、進んで発言したり、観察しようとしたりする。 《関・意・態》 ・14時と15時の太陽の位置は青少年の家職員に調べてもらう。 ・観察結果を生かしながらまとめていく。 ・太陽の動きと比較しながら、月の動きをまとめていく。 ・青少年の家職員と協力して行う。 ・太陽と月が、東から南の空を通過して西に動いていると考えることができる。《思考》 ・月の表面のようすに興味を持ち、進んで発言したり観察しようとしたりする。 《関・意・態》 ・太陽の位置を観測器具を用いて正しく測定し、記録することができるか 《技・表》
天体観察	11時の太陽の位置を記入する。	
天体観察	南中の太陽の位置を記入する。	
天体観察	13時の太陽の位置を記入する。	
	太陽について知っていることを発表する。	
	天体望遠鏡の使い方を覚える。	
	天体望遠鏡と遮光板を使い、太陽の表面のようすを観察する。	
天体観察	16時の太陽の位置を記入する。	
天体観察	プラネタリウムで太陽の1日の動きをまとめ、南中についておさえる。	
	月の動きをまとめる。	
	月の形が変わることをボールを使って見せる。	
天体観察	月について知っていることを発表する	
	天体望遠鏡を使って、月の表面を観察する。	
天体観察	8時の太陽の位置を記入する。	
天体観察	9時の太陽の位置を記入する。	

(オ) 自然観察指導案(5年生)

1 日 時 6月12日 10:15~11:00

2 活動名 自然観察

3 教科名 理科

4 単元名 アブラナの花と実

5 単元について

花が咲いて下の方に実ができ始めているアブラナを見て、花から実への変化や花のどこが実になるかに興味を持ち、花のつくりを調べ、めしべのもとが実になると推論することができるようにする。

また、たね土にまくとやがて発芽して成長し、また実を結んでたねを作ることから、植物の多くは、たねをもとにして子孫を増やしていくことをとらえることができるようにする。

6 単元全体の指導計画(3時間扱い)

第1次 アブラナの花と実

2時間

アブラナのつぼみ、花、実の変化と花のつくりを調べる

(1)

アブラナのつくりと実のでき方をまとめる

(1)

第2次 ほかの花のつくりやたねのでき方

1時間/本時

7 本時の目標

- ほかの花のつくりに興味を持ち、進んで観察しようとする。 《関・意・態》

8 本時の展開

活動項目	学 習 活 動	支 援 ・ 評 価
自然観察	アブラナの花のつくりを確認する。 他の花もアブラナの花のつくりと同じかを調べる。 花のつくりとたねのでき方をまとめる。	・花にはどれにも、めしべとおしべがあり、それらの形と数は違って、めしべのものが実になることをとらえさせる。 ほかの花のつくりに興味を持ち、進んで観察しようとする。 《関・意・態》

(カ) 創作活動「焼き物(粘土細工)」指導案(5年生)

- 1 日 時 6月13日 9:00~12:00
- 2 活動名 身近なものから想像を広げて、焼き物を作る。
- 3 教科名 図画工作
- 4 題材名 土と炎の小学校
- 5 題材について
素焼きを中心とした焼き物の基本的な知識や表現の方法を知らせ、粘土で作る焼き物の楽しさを体験させる題材である。
粘土と素焼きの関係、焼成温度の違いによる焼き色の変化を知らせたい。
また、実態や状況に応じて砂や小石、ビー玉なども材料として表現に取り入れることができるように示した。
粘土の板作りの方法を体験しながら、理想とする学校を想像したり空想したりして、自分の思いを焼き物に表現していく楽しさを追求させる活動である。来年度の校舎新築をひかえた子どもたちにとっては、より意欲的に取り組める題材である。
- 6 学習計画(5時間扱い)
 - ・自分ならどんな学校を作るかを想像する。 1時間
 - ・校舎や遊具、池やプールなどを作り方や材料を工夫して作る。 3時間/本時
 - ・十分に乾燥させた後、焼成して仕上げる。 依頼
 - ・作品を並べ、自他の作品の良さを見つけてひと口メッセージを書く。 1時間
- 7 本時の目標
 - ・自分の思いにあわせて、作り方や材料を工夫して作っている。
- 8 本時の展開

学 習 過 程	学 習 活 動	支 援 ・ 評 価
関心や意欲を持つ	厚さ1cmの粘土の板を作って校庭の形や大きさを決める。 校庭に自分の作りたい校舎や遊具などを作っていく。 小石や砂、ビー玉やおはじきを使って飾っていく。 制作の途中で自由に友だちの作品を見る。 自分の思いを広げながら、さらに作り方や材料を工夫して作り、完成させる。	・のばし棒や粘土べらなどの用具、小石や砂、ビー玉やおはじきなどを自由に使えるようにしておく ・子どもの思いに共感し、表し方を温かく見守っていく。 ・作っていくうちに新たな発想や作り方を考えついた子を賞賛し、さらに意欲的に制作するように励ます。 自分の思いにあわせて作り方や材料を工夫している。 ・必要に応じてどべの使い方やおはじきの使い方などについて助言する。 ・表現のきりがよい時や表現の進まない時など友だちの邪魔にならないように作品を見て回り、参考にするようにする。 ・時間の見通しを持たせながら制作させるようにする。

(キ) 講話・ネイチャーゲーム・植林指導案(5年生)

1 日時 6月13日 13:30~15:00

2 活動名 環境についての講話を聞き、植樹する

3 教科名 社会

4 単元名 見直そう私たちの国土～環境を守る～

5 単元について

本単元は、これまでの産業学習を振り返り、地域の環境がどのように変わってきたのかという「変化」への視点と、これからの国土、さらには地域環境をどのように守り育てるかという「保全への努力」という視点で構成している。

特に、今日強く求められている「環境教育」の視点をふまえ、国内の過疎・過密・森林・水資源の確保などの事例とともに、砂漠化・温暖化などの地球環境を取り巻く諸問題についても取り上げるようにしている。

また、本単元での学習は、第6学年の「世界の中の日本人」などの学習にもつながっていくものである。

ここでは既習事項を生かしながら、子どもたち一人一人に、国民として環境保全のために協力できることは何かを気づかせ、国土への愛情を育てたい。

6 単元全体の指導計画(16時間扱い)

第1次 人口を考える 5時間

第2次 環境を守る 6時間

・森林を育てる (4) 3・4 / 6本時

・自然を守る (2) 5 / 6本時

第3次 地球の環境を考える 3時間

・地球から森林が消える (2)

・かけがえのない地球 (1)

第4次 子どもレポートを書こう 1時間

7 本時の目標

- ・森林とわたしたちのくらしとのかわり方について考えることができる。
- ・森林は国土の保全や水資源の確保のためにも重要なはたらきをしていることをとらえることができるようにする。
- ・自然は、一度破壊するとともにもどすまでには長い年月と手間がかかることをとらえることができるようにする。

8 本時の展開

活動項目	学 習 活 動	支 援 ・ 評 価
講師の紹介 講 話	あいさつをする。 森林のはたらきについて話を聞く。 「緑のダム」について詳しく話を聞く。	・メモを取りながら聞くようにさせたい。 森林のはたらきや森林の保護について話をまとめながら、意欲的にメモを取ることができるか。
植 林	自然を守る活動について話を聞く。 聴診器で木の水の流れる音を聞く。 植林の仕方を知る。 植林をする。(看板製作) 道具を片づける。	・木が生きていることを実感させたい。 ・木の成長を見守っていかせたい。 植樹を通して、豊かな自然を残そうとする実践的態度を身につけることができたか。

エ 分析と考察

4年生と5年生との合同宿泊研修であることから、2学年が一緒に行う活動を教科扱いにしてどのように展開するかが課題であったが、施設の特性を生かすこと、そこにどの教科のどの単元を入れられるかを第一に考えてプログラムを作った。

(ア) 自然観察(4年生)

a 活動概要

活動は4回に分け、植物園、営火場周辺にある西洋たんぽぽの花の開閉のようすを観察・記録した。観察・記録の仕方については担任が指導し、周辺の植生についての案内・説明は青少年の家職員が担当した。

b 成果及び今後の課題

草花の観察は、学校の一日の活動の中で行うことは困難であるが、青少年の家では最後まで児童の興味・関心を持続させて実施することができた。

また、夜の観察は宿泊研修ならではの活動であった。

教師と青少年の家職員とのチームティーチングによる、豊かな自然環境の中での指導は、子どもたちの興味を喚起し、活発な質問や積極的な観察活動に結びついた。

エゾたんぽぽの開花時期が1週間前だったことから、今後、施設において、時期ごとさまざまな花の開花マップを作成、充実することが望まれる。

(1) 創作活動「粘土細工」(4年生)

a 活動概要

からまつ広場(林の中)で、教師の指導のもと、粘土細工を行った。成形は施設の用具を使用し、完成した作品は施設で1ヵ月間乾燥させた後、施設の窯で焼成した。

b 成果及び今後の課題

野外での創作活動は、カプトとトンボを合わせたカプトンボといった作品など、教室の中では生まれにくいイメージ展開が見られ、単元のねらいで求められるさまざまな発想による作品制作に結びついた。

施設にある設備を有効に活用することにより、効率的な展開が図られた。

(ウ) 森の講話、ネイチャーゲーム、植林活動(4年生、5年生)

a 活動概要

からまつ広場で、森林のはたらきについて、施設ボランティアの話を聞く。

植物園で、みずなら、やまざくらの木の鼓動を、聴診器を使って聞く。

とち、みずならの苗木を植林する。

b 成果及び今後の課題

豊かな生活経験を持つ施設ボランティアによる指導は、子どもたちへの説得力が大きく、より深い知識を体得させることができた。

聴診器による木の鼓動の聞き取りは、「木の中でドクンドクンと心臓の音のように聞こえた」など生き生きとした感想を引き出し、木が生きていることを実感させるものとなり、森林が環境に果たす役割について、耳や目、はだ等身体を通して、体験的に学ばせることができた。

植樹では、穴掘り、散水などが協力的に行われ、研修後、植えた木のようにすを見に来たという意欲を示すなど、情意面での効果も大きかった。

(I) 天体観察(5年生)

a 活動概要

活動を7回に分け、太陽位置測定器を使い、方位と高さを調べ、記録用紙に記入する。観察・記録については教師が説明し、機器の使い方は青少年の家職員が指導する。14時と15時の観察は、子どもたちが他の活動中であることから青少年の家職員が行い、後で記録させる。

青少年の家職員の指導のもと、天体望遠鏡と遮光板で、太陽の表面のようすや動きを観察する。

プラネタリウム室で、太陽と月の動きについて説明を行った後、月と太陽の番組投影を行う。機器操作は青少年の家職員が行い、説明は教師と青少年の家職員が共同で行う。

曇りでできなかった月の表面の観察を、翌朝、天体望遠鏡を使って行う。

b 成果及び今後の課題

位置測定器や天体望遠鏡を使い、諸活動の間を利用して1時間ごとの太陽測定を行い、具体的・数量的な観察・記録ができた。機器操作は、慣れている青少年の家職員が指導したことにより、効率的に行われた。

天体望遠鏡と遮光板による太陽観察では、太陽の早い動きを「逃げる」と表現するなど、子どもたちの感性を刺激する活動となった。

プラネタリウムの併用で太陽と月の1日の動きが短時間で確認でき、それらの動きについての理解が深まった。月の形は太陽との位置関係によって変わることも、投影機を使っての説明で具体的に理解された。

観察等の野外での活動は天候に左右されやすく、荒天時の裏番組は予定しているものの、すべてについて教科に位置づけることは限界があることから検討を要する。

(4) 事例4「授業形態による日帰り研修 ~プラネタリウムを利用した理科授業~」

ア 学校の状況

学 校 名	二戸市立仁左平小学校					
期 日	平成9年11月5日(水) ~ 11月7日(金) 3日(日帰り)					
目 標						
参 加 者		児 童 ・ 生 徒		引率教員	ボランティア等	計
		6 年	小 計			
	男	12	12	1		13
	女	8	8			8
	計	20	20	1		21

イ 研修活動プログラム

第 一 日	13:30	15:00	第 二 日	17:10	18:30	21:30	第 三 日	17:10	18:30	21:30
	所ハス移動	・プラネタリウム学習		所ハス移動	所ハス移動	夕食		・プラネタリウム学習 ・天体観察	保護者の迎え	所ハス移動
	理 科			理 科				理 科		

ウ 活動の展開

理科学習指導案

- 1 単元名 星とその動き
- 2 単元の基本的な考え方
 - (1) 学習指導要領との関連
 - 6年C
 - ウ 南天の星の動きは太陽の動きと似ていること。また、北天の星は北極星を中心に回っているように見えること。

エ 全天の星は、同じ方向に動き、1日たつとほぼ元の位置に見えること。

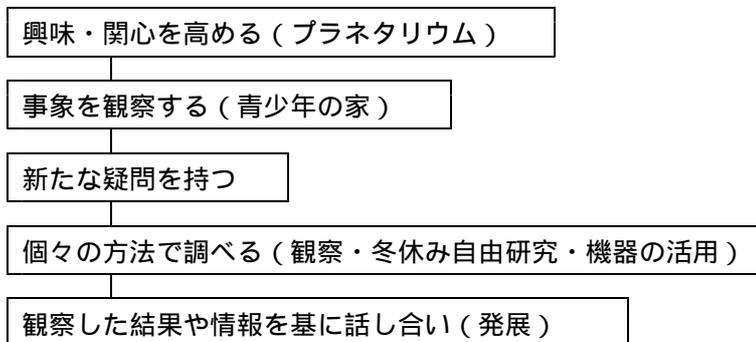
(2) 教材について

本単元では、星座は時間がたつと位置や傾きは変わるが、並び型は変わらないこと、さらに星の動きには規則性があり、全天の星は、東の方から西の方へ、1日に1回転するように動いて見えるという見方や考え方ができることがねらいである。

(3) 児童の実態（略）

(4) 活動化での構想

本単元で予想される児童の活動の流れを概観すると、次のようになる。



3 単元の指導目標

(1) 自然事象への関心・意欲・態度

星は動いているか、並び方はどうかなどに興味を持ち、進んで写真資料を比べて予想しようとする。
各方位の星の動きに興味を持ち、調べる方位と星座を決め、進んで観察の準備をしようとする。

(2) 科学的な思考

北の空の星は、北極星を中心にして左回りに回転するように動いていると考えることができる。
空全体の星は、東から西へ1日に1回転しているように動いていると考えることができる。

(3) 観察・実験の技能・表現

南の空の星は東から西へ動き、星座は傾きが変わっても並び方は変わらないことを理解する。
北の空の星の動きを観察して、記録することができる。
東や西の空の星の動きを観察して、その動き方を記録することができる。

(4) 自然事象についての知識・理解

星の集まりは、時間がたつと位置や傾きは変わるが、並び方は変わらないことを理解する。
南の空の動きは、太陽の動きに似ていることを理解する。
北の空の星は、北極星を中心に回っていることを理解する。
全天の星は、同じ方向に動き、1日たつとほぼ同じ位置に見えることを理解する。

4 内容の関連と系統

5年 太陽と月の動き

太陽や月は絶えず動いていて、東の方から出て南の空を通り西の方に入る。

4夏の星

星座や星には、それぞれ決まった形といういろいろな明るさや色をしたものがある。

[本単元]

星座は、時間がたつと位置や傾きは変わるが、並び方は変わらない。
南の空の星の動きは、太陽の動きと似ている。
北の空の星は、北極星を中心に左回りに回転している。
空全体の星は、東の方から西の方へ、1日に1回転して動いている様に見える。

5 単元の展開

(1) 既習単元

日なたと日陰（第3学年）
太陽と月（第5学年）

星の特徴（6年既習）

星には明るさや色の違うものがあること
星の集まりは、時間がたつと位置や向きが変わるが、並び方は変わらないこと

第1次（2時間）

空全体の星の動きを調べよう
それぞれの星の動きを調べよう

青少年の家（プラネタリウム）

第2次（4時間）

北極星の周りの星の動きを調べよう（発展学習1 夜間観察）

冬の代表的な星座を見つけよう（発展学習2 夜間観察）

親子観察

第3次（2時間）

全天の星の動き方をまとめよう

調べたことを発表しよう

6 単元の指導の実際

(1) 第1次（2時間）

星は決まった動き方をしているのだろうか
全天の星の動き方を観察しよう

青少年の家（プラネタリウム）

(2) 具体目標

ア 星空に関心を持って、星の特徴や動き方を調べてみようとする意欲を持つ。

(3) 展開

担任 職員

主な発問と事象	児童の活動と意識の流れ	担任と職員の関わり（支援と評価）
<p>1 これまでどのような星や星座の学習をしましたか</p> <p>2 星座はいつも同じ場所に見えるのかな</p> <p>3 星や星座を決めて動き方を調べよう</p> <p>4 北の空の動きとそれぞれの空の動きを調べよう</p>	<p>空全体の星の動きを調べよう。 それぞれの星の動きを調べよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カシオペア座 ・北極星 ・北斗七星 ・夏の大三角 ・どのような動き方をしているのかな <p>今日学習したことをワークシートに書く</p>	<p>青少年の家の職員を紹介する。 プラネタリウムを使って、学習することを知らせる。</p> <p>課題提示は担任が行う。</p> <p>季節によって見える星が違う。 実際にプラネタリウムで行う。 春・夏・秋・冬の代表的な星座</p> <ul style="list-style-type: none"> ・星座早見盤を使って調べさせる。 <p>気がついたことを発表させる。 疑問に対してプラネタリウムを使って説明する。 北極星・北斗七星・カシオペアに焦点を絞る。 1等星・2等星の違いも教える。 プラネタリウムで説明する。</p>

(4) 第2次（4時間）

北極星の周りの星の動きを調べよう（発展学習1 夜間観察）

冬の代表的な星座を見つけよう（発展学習2 夜間観察）

(5) 具体目標

ア 星の動きに興味をもって、調べてみようとする意欲を持つ。

イ 実際の空を観察して星の動き方を調べることができるようにする。

ウ 北極星は、時間がたっても動かないという見方や考え方ができる。

エ 天体望遠鏡を使って、観察ができる。

(6) 展開

担任 職員

主な発問と事象	児童の活動と意識の流れ	担任と職員の関わり（支援と評価）
1 北の空の動きを調べよう 北の空で特徴のある星や星座を見つけよう		プラネタリウムを使って。 課題提示は担任が行う。
2 北極星を発見しよう		北斗七星を発見させる。 カシオペアを発見させる。
3 実際に観察してみよう		プラネタリウムを使って。 天体望遠鏡の使い方を説明する。 学習カードの使い方を説明する。

(7) 展開

担任 職員

主な発問と事象	児童の活動と意識の流れ	担任と職員の関わり（支援と評価）
1 プラネタリウムを使って冬の星座を調べる 冬の代表的な星座を見つけよう		職員を紹介する。 課題提示は担任が行う。
2 実際に観察してみよう		プラネタリウムで代表的な星座を紹介してもらう。 天体望遠鏡の使い方を説明する。 学習カードの使い方を説明する。

エ 分析と考察

小学校における星の指導のねらいは、観察を通して星の日周運動を広大な空間の広がりや長い時間の経過でとらえさせることにある。

その指導に当たっては次の困難点があることから、これらを克服し、指導のねらいを達成するという視点に立ち、活動計画を展開した。

観察が天候に左右される。

直接指導することが難しく、家庭における子ども任せの観察になりがちである。

観察方法、記録方法上の誤差が大きい。

各家庭における観察のため、教室で観察結果を集約することが難しい。

(ア) 実施概要

a 第1次（11月5日 13:30～15:00）

プラネタリウム室で、担任が学習のねらいを確認した後、北の空の星の動きについて発問、班ごとの話し合いを指示。各班による発表を行う。

青少年の家職員がプラネタリウムを操作し北の空の動きを示す。

担任が北の空の星の動きについてまとめ、休憩時にノートへの書き込みを指示する。

（プラネタリウム室ではノートをとることが困難）

担任は、東、西、南の空の星の動きを予想させ、班ごとの話し合いを指示する。

プラネタリウム操作により東、西、南の空の動きを示す。

研修室で、青少年の家職員が星座早見盤の見方の説明した後、担任が学習のまとめを行う。

b 第2次(11月6日 17:45~20:00)

最初に、天体望遠鏡による金星、火星の観察を行う(金星は6時頃には見えなくなるので)。操作方法等については、青少年の家職員が指導する。

プラネタリウム室で、担任が前時の復習を行った後、青少年の家職員が機器を操作し全天の動きを示し、恒星と惑星、星の等級、星の明るさと温度、冬の星座とそれに関わる神話について説明する。

屋外で、肉眼による星と星座の確認、天体望遠鏡と双眼鏡を使った木星、金星、土星、スバルの観察を行う。

研修室で、担任が指導し、学習のまとめを行う。

c 第3次(11月7日 17:45~20:00)

プラネタリウム室で、担任が前時の復習を行った後、青少年の家職員がプラネタリウムを操作し、番組投影を行う。

屋外での親子観察ということで、子どもによる親への説明を中心に進め、肉眼による星と星座の確認、天体望遠鏡と双眼鏡を使った木星、金星、土星、スバルの観察を行う。

(1) 成果及び今後の課題

a プラネタリウムを天体学習の一つの教具として、学習のねらいにあわせて有効・適切に活用することができた。特に、夜見える星のことを日中に学習する上で、プラネタリウムの果たす効果は大きかった。

プラネタリウムを理科授業に活用する効果をまとめると、次のとおりである。

地形や天候に左右されず、立体空間の中で任意の時刻の空が再現でき、分かるまで何度も繰り返して見ることができる。

日周運動を短時間で再現でき、北極星を中心に星々が動いているようすが一目で分かる。

星の集まりは、時間がたつと位置や向きが変わっても並び方は変わらないことが観察できる。

星は時間がたつと同じ方向に動き、1日たつとほぼ同じ位置に見えることが観察できる。

全天の星の動きを観察しまとめることができる。

ポインターの矢印で星を示し確認ながら効果的に指導できる。

星を線画で結び示すことにより、北斗七星やカシオペア座等の見つけ方を分かりやすく示すことができる。

星座絵を使った解説により、伝説の世界へとロマンを広げ、子どもたちの興味を喚起することができる。

b 「理科授業」「観察・実験」「星の学習」に対する児童の興味・関心について

事前・事後の意識調査では大きな変容は認められないものの、高まり傾向は見られる。

「星の学習をして楽しかったこと、おもしろかったこと」についての自由記述では「プラネタリウムでの星の学習が楽しかった」「月のクレーターがきれいだった」「土星の輪

まで見えたのがすごかった」「木星の模様が見れてよかった」「春や夏の星をもっとたくさん見たい」などの回答があり、プラネタリウムで星が動くことを実感し、惑星のようすを実際に見たときの感動、教室を離れて学習することの新鮮さなど、星に対する関心・態度は確実に良い方向に向いていることがうかがえる。

- c 知っている星座や星の名前であげられた数は、事前・事後の調査では、70から105になり、1.5倍に増えている。

また、今までに実際に見た星や星座の名前については、14から36になり、2.6倍に増えている。

プラネタリウムで学習したことを、すぐに屋外で観察、確認したことにより、確かなものとなったと考えられる。

- d 専門職員による指導は効率的であり、直接指導される子どもだけでなく、教師にとっての研修効果も大きい。

- e 第3回は保護者も参加し、青少年の家で一緒に夕食を取り、天体観察を行うことで親子のふれあい効果もあった。

- f プラネタリウムを学習に利用する上で、カリキュラムの再編成、事前打合せと準備、当日の移動手段と時間の確保等について、検討していくことが必要である。

6 研究のまとめと今後の課題

本研究は、学社融合の理念に立った青少年教育の拡充方策を検討するとともに、青少年の家等青少年教育施設における学校利用モデルプログラムを開発し、青少年教育の充実に役立てようとしたものである。そのまとめと今後の課題は、次のとおりである。

(1) 研究のまとめ

- ア 文献研究や先行研究を参考に、学社融合の理念に立った青少年教育の意義について明らかにすることができた。
- イ 青少年の家における学校利用及び学校における青少年の家利用についての調査及びその分析・検討により、次のことが明らかになった。
- (1) 青少年の家は、学校利用の減少や利用期間の短縮化の中で、青少年の体験活動の充実等の課題があり、今後、新たな事業展開を図る必要があること。
- (1) 学校は、学校週五日制に伴う授業時数確保のため、特別活動の精選により青少年の家の利用が減少し、子どもたちに体験活動の場と機会の保障についての課題があること。その中で、青少年の家の利用において、教科に位置づけた体験的な学習活動を取り入れることについて、その有効性を認め、期待していること。
- (1) 青少年の家において教科に位置づけた体験的な学習活動を展開することは、学社融合の理念に立った青少年教育の充実に役立つものと考えられ、モデルプログラムの開発が求められること。
- ウ 青少年の家における学校利用モデルプログラム開発のための基本構想を立案できた。
- エ 基本構想をもとに、モデルプログラム開発のための試案をまとめることができた。
- オ 試案をもとに、モデルプログラムを作成することができた。

カ 活動実践をとおして、モデルプログラムの検証が行われ、次のことが確認された。

- (ア) 青少年の家における教科に位置づけた体験的な学習活動は、子どもたちの興味・関心を引き出し、高める効果が大きいこと。
- (イ) 青少年の家での活動は、時間的にも空間的にも自由な広がりを持ち、施設特有の設備と野外環境、施設職員やボランティアなどの活用などにより、専門性の高い活動が展開できること。
- (ウ) 学校と青少年の家が一体となり、青少年の家の活動と教科活動とを結びつけていく中で、学校教育と社会教育の連携・融合が図られたこと。

(2) 今後の課題

ア 青少年の家は、子どもたちの「生きる力」の育成をより効果的にするため、生活体験、社会体験、自然体験等の活動プログラムの充実を図るとともに、学校との連携・協力を図りつつ、学校教育の中で活用しやすいプログラムや教材を開発していくことが必要である。

イ 青少年の家は、教科に位置づけた体験的な学習活動について、各活動ごとに学年に対応した活動プログラムや展開例を開発、充実していくことが求められる。

また、指導計画への位置づけ、指導内容や指導方法、評価についての研究も必要である。

さらに、施設設備や教材教具、人的体制の整備・充実等についての検討も必要である。

ウ 教科に位置づけた体験的な学習活動は、青少年の家以外の社会教育施設での展開も期待されるものであることから、公民館や博物館等の社会教育施設における取り組みが望まれる。

おわりに

この研究を進めるに当たり、ご多忙の中、調査にご協力いただいた関係小・中学校、県立青少年の家並びに二戸教育事務所の関係者の方々に心から感謝申し上げますとともに、本研究が生涯学習の観点に立った青少年教育の在り方を追求していくうえで、いささかなりとも役立つことを願って、研究の結びとしたい。

[主な参考文献]

- 1 社会教育審議会答申『青少年の徳性と社会教育』(昭56.5.9)
- 2 社会教育審議会建議『在学青少年に対する社会教育の在り方について』(昭49.4.26)
- 3 中央教育審議会答申『生涯教育について』(昭56.6.11)
- 4 臨時教育審議会答申『教育改革に関する二次答申』(昭61.4.23)
- 5 臨時教育審議会答申『教育改革に関する三次答申』(昭62.4.23)
- 6 中央教育審議会答申『21世紀を展望した我が国の教育の在り方』(平8.7.19)
- 7 生涯学習審議会答申『地域における生涯学習機会の充実方策について』(平8.4.24)
- 8 国立青年の家・少年自然の家の在り方に関する調査研究協力者会議報告『国立青年の家・少年自然の家の改善について - より魅力的な施設に生まれ変わるために - 』(平7.7.17)
- 9 地域・学校新システム研究会報告書『地域における青少年の学校外教育・学習システム構築に関する調査』(平8.8.3)
- 10 『青少年教育施設における学校利用促進に関する調査研究報告書』
(青少年教育施設研究会 国立オリンピック記念青少年総合センター 平8.3)
- 11 平成7年度研究紀要151『生涯学習の充実に関する研究 - 学校教育と社会教育の連携をとおして - 』県立総合教育センター(平8.7.25)
- 12 『生涯学習の設計』(山本恒夫・浅井経子・手打明敏・伊藤俊夫 実務教育出版 平7)
- 13 『成人の発達と生涯学習』(三浦清一郎 ぎょうせい 昭57)
- 14 『小学校学習指導要領』『中学校学習指導要領』(文部省 平元.3)
- 15 『小学校指導書』(教育課程一般編、各教科編)(文部省 平元.6)
- 16 『学校教育指導指針(幼稚園・小学校・中学校)』(岩手県教育委員会 平8)
- 17 『生涯学習事典』(日本生涯教育学会編 東京書籍 平2)

研究にご協力いただいた学校・施設等

二戸市立仁左平小学校
軽米町立小軽米小学校
一戸町立一戸小学校
一戸町立小鳥谷中学校
岩手県立県北青少年の家
二戸教育事務所